

創星

stardust



1

フリーペーパー『創星』創刊号

<http://p.booklog.jp/book/58836>

著者：星屑書房

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/stardustbooks/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58836>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58836>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ

創★STARDUST星

- 03 短歌
- 09 妄想百景
- 13 イヌとペンギン
- 17 自伝的小節
- 19 雑誌タイトルポツ案
- 20 サブカル対談
- 27 憂鬱な水曜日
- 33 マチコ先生に訊け！
- 34 大人志願
- 36 シュウエン
- 48 メンバー紹介

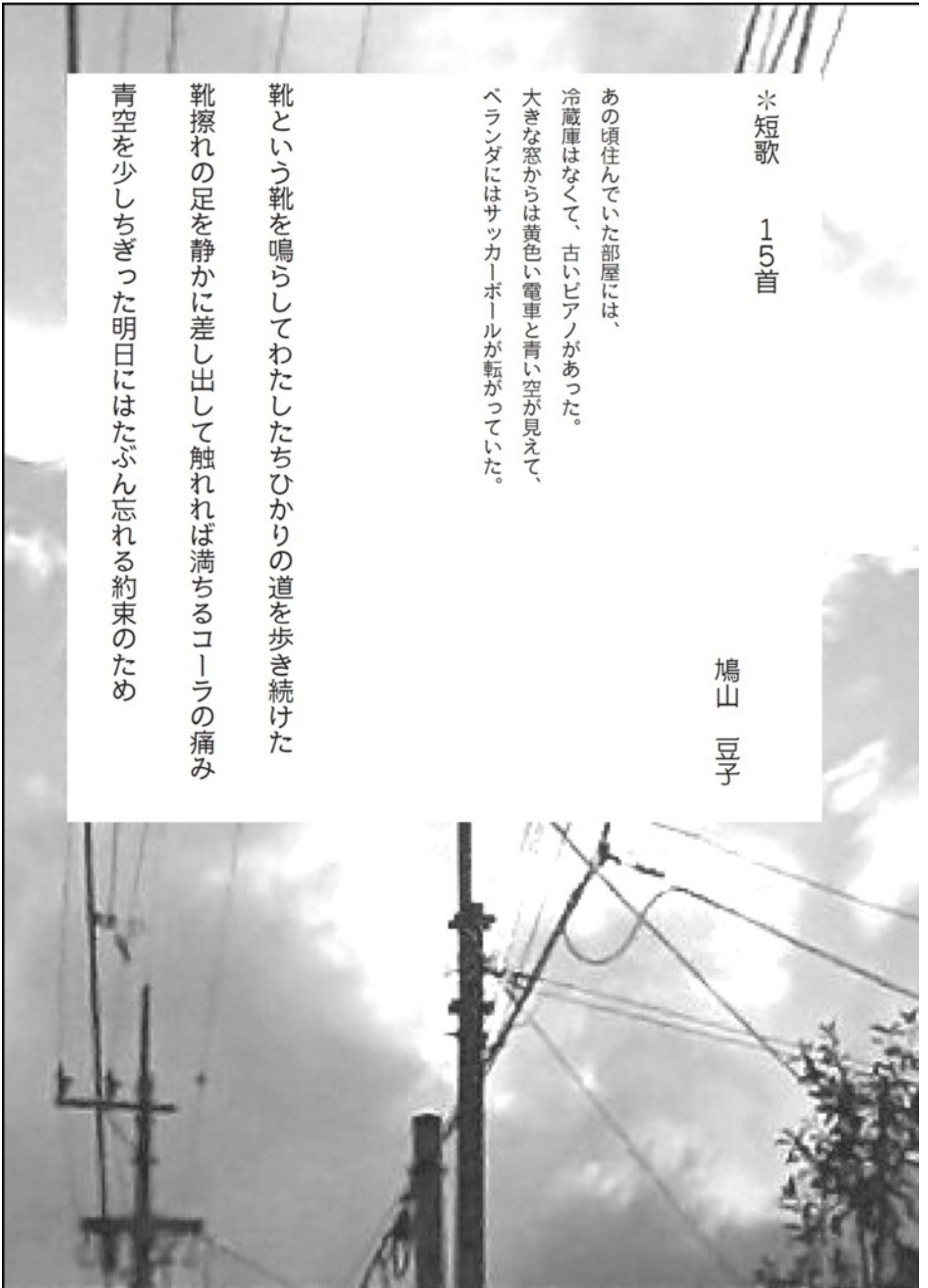


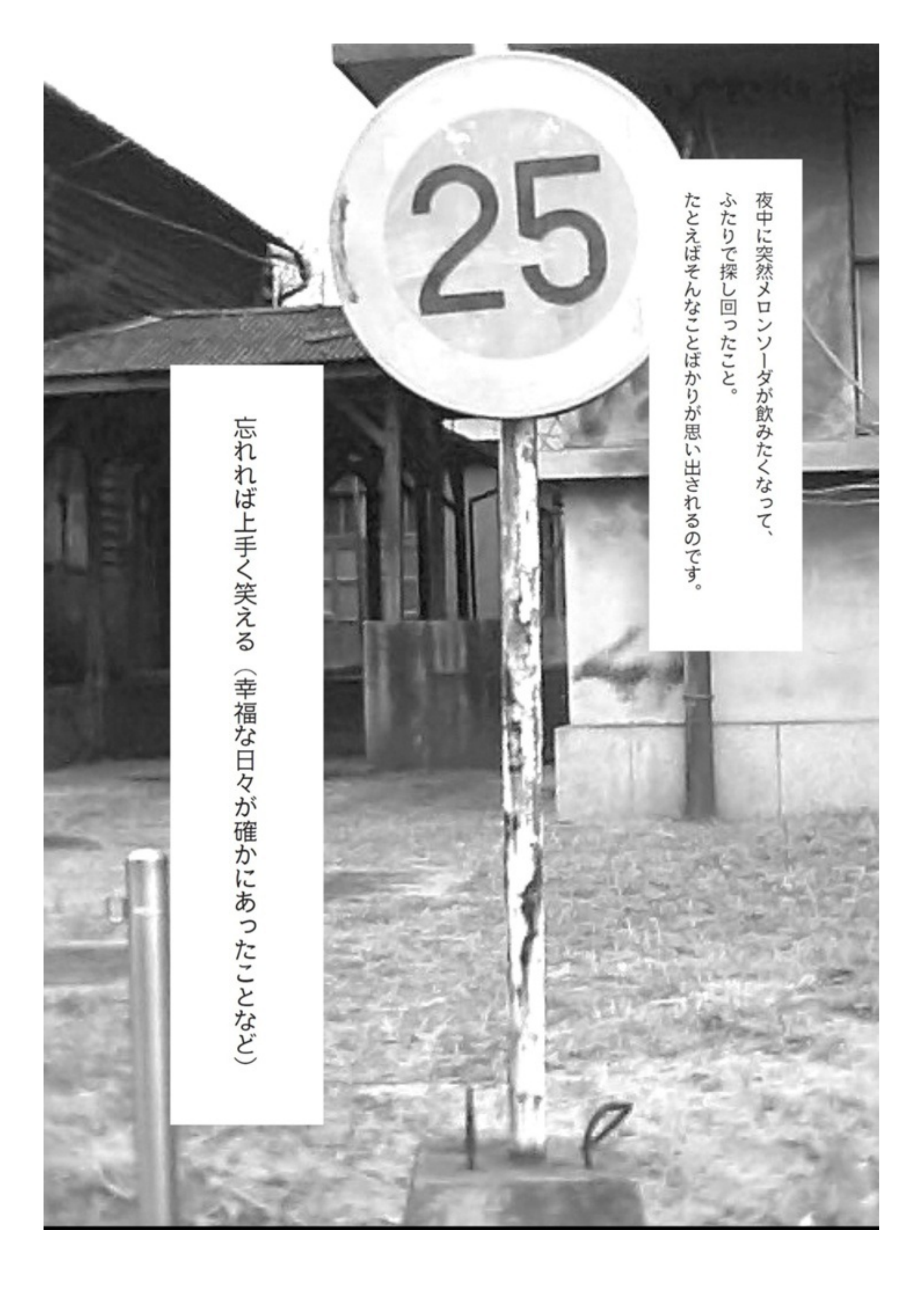
＊短歌 15首

鳩山 豆子

あの頃住んでいた部屋には、
冷蔵庫はなくて、古いピアノがあった。
大きな窓からは黄色い電車と青い空が見えて、
ベランダにはサッカーボールが転がっていた。


靴という靴を鳴らしてわたしたちひかりの道を歩き続けた
靴擦れの足を静かに差し出して触れば満ちるコーラの痛み
青空を少しちぎった明日にはたぶん忘れる約束のため






夜中に突然メロンソーダが飲みたくなって、
ふたりに探し回ったこと。
たとえばそんなことばかりが思い出されるのです。

忘れれば上手く笑える (幸福な日々が確かにあったことなど)



あなたの心に残るため、
あなたの前から消え去ります。
この小さな実験が成功するように、
遠い街で祈ります。

会いたいよりんごの森に迷い込み失わなければ完成しない



あなたに出会ってわたしは生まれた。

あなたの手によって、

わたしの言葉は意味を持ち、

わたしの心は癒された。

あなたはわたしの世界になって、

わたしは初めて自由を知った。

あなたはわたしのすべて。

あなた。

あなたは誰ですか。

鉄棒に垂れて青空眺めてる
お前なんかを必要として



うつむいて君と歩いた校庭の銀杏並木のやわらかき海

返信がないこと確かめるために打つメールのように秋風が吹く

冷蔵庫にもたれて眠る木曜日もう誰も笑わなくていい

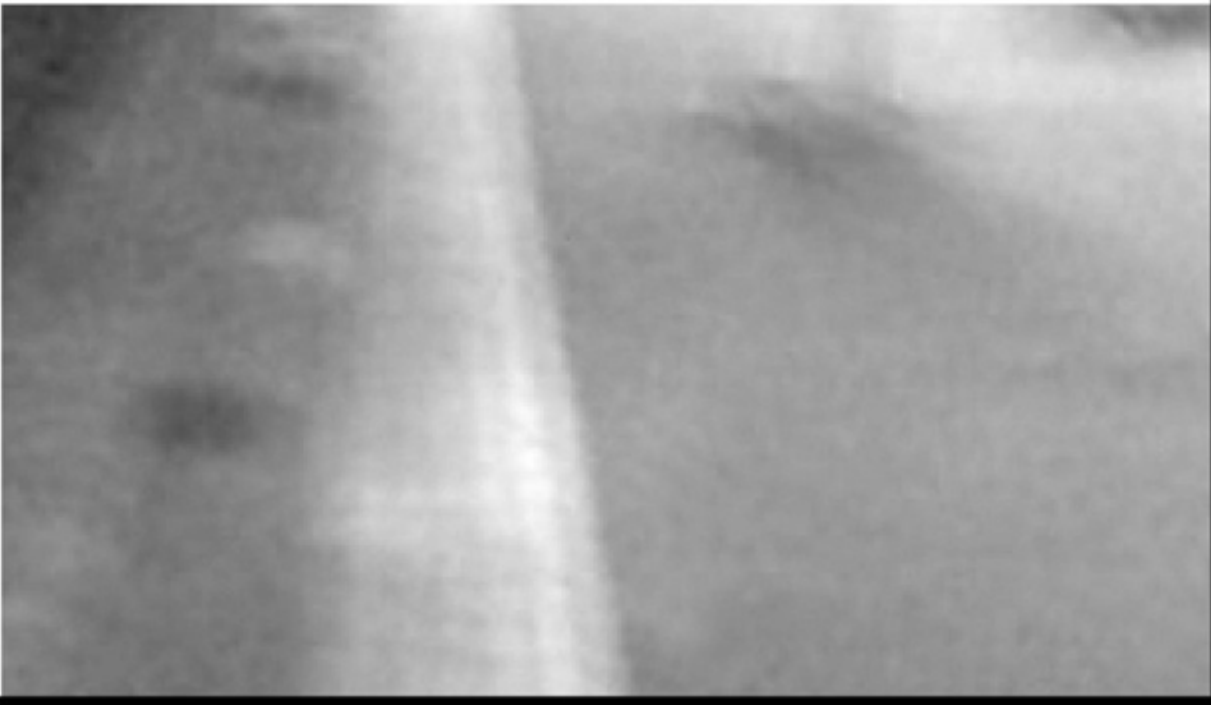
手のひらにボタン溢れる昨日見た夢で誰かを引き止めきれず

一列に並ぶ机に夏の日のひかり弾けて笑う月曜


会いに行く口実として瓶詰めにした青空拾う波ぎわ

光線が歪む理科室さつきから聞こえないんです糸が千切れて

さようなら きつく結んだマフラーに鼻を埋める初雪の日



話したいことは沢山あったのに、
いつも何を言えればいいのかわからなかった。



見つけてくれてありがとう、とあの人はささやいた。

青白い首筋少し傾けてたったひとつの約束がある

妄想百景

マチコ・フオンドヴォー



おはよう
おはよう

通勤・通学の
電車の中って
けっこう退屈ですよな？

そんな時は
向かいに座っている人に
名前をつけてみましょう
(勝手に)

おはよう
おはよう

遠藤 善男 (52)

木村 優 (27)

平田 潤 (36)

ハンナ (61)

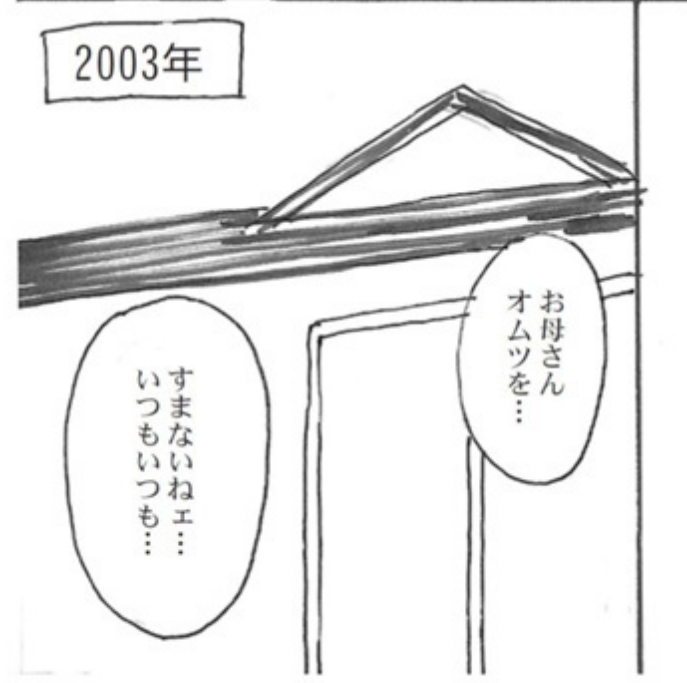
1970
サンディエゴ

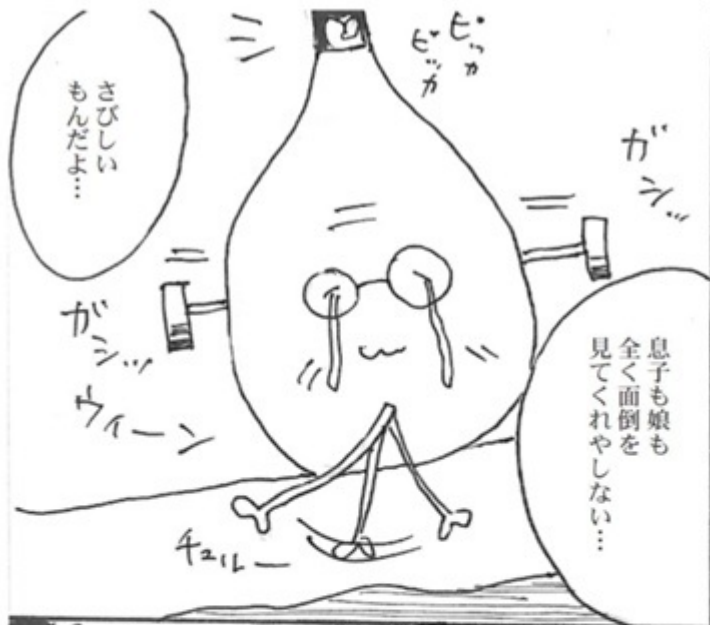


そうか…
ハンナは日本人と
結婚するの…

うん、パパ
もう決めたの…

ハンナ (61) さそり座
B型





さびしい
もんだよ...

息子も娘も
全く面倒を
見てくれやしない...



悪いねえ
こんな体にな
なっちまって
まったく
情けないったら...

お母さん...



だって私は
あなたの娘ですから...



お母さん...
どうしてこんなに
良くしてくれるんだい

ハンナ...
あんたには随分
辛くあたってきたのに



ハンナ!

めっち。いい人...

このように、
気になる人物を見つけたら
より掘り下げてみると
楽しいでしょう
それでは、よい妄想を...

続く...の?

ペンギンとペンちゃん

連載第1回

いちろ まみ

第一話 南極を離れて

ペンギンのペンちゃんは、大学のペンチでうとうととしていました。ときおり、びゅうっと吹く風に眠りを妨げられながらも、お昼のあたたかい陽にからだをまかせてうつらうつら。だんだん視界がぼやけていきます。白く、白く……。

ペンちゃんは南極大学からやってきました。一年を通じて冬が続き、一面に張った氷に雪が積もった場所、みんな身を寄せ合いながら勉強していました。誰か風邪を引いて休んだら、みんなで魚を持ってお見舞いに行きました。誰に誘われることなく、みんな自然と集まってきます。南極大学のみんなはいっしょに行動することがとても好きなのです。

一年が終わろうとしているとき、ペンちゃんは突然ペン太先生から呼び出されました。

「ペンちゃん、日本に行ってみないかい？」

先生は地球儀を指さしました。南極から遠く離れた一つの小島。それはペンちゃんの留学先でした。

ペンちゃんのババは言いました。

「さすが、うちの子とも！ 頑張ってきて来なさい！」

ペンちゃんのママは言いました。

「日本はあるかわからないよ。ママもついて行こうかしら」

ペンちゃんのお兄ちゃんは言いました。

「なんだ、そんな小さい島か。南極の方が広いぜ」

ペンちゃんは日本へ行くことを決めました。冷たい海にもぐり繰り返し魚を獲って、敵が来ればみんなて身を寄せ合って守り、左から風が吹けばみんな右を向く。そんな生活から抜け出したかったです。大空を一羽だけで飛ぶ、天敵の鷹のようになりたい。ペンちゃんは大海を泳ぎ出そうとしていました。

ペンちゃんは荒れた海を泳ぎ続け、気付いたら新宿にいました。

人の波、波、波。ペンちゃんは自分の歩みを確かめられませんでした。

人の間をすり抜けることで精一杯だったので。気をつけていても何度もぶつかりました。舌打ちも怒鳴り声も存在を疑うような目も、泳ぐようにすり抜けて、やっとのことで駅を探し出しました。

そこで、ペンちゃんは見たのです。大きな画面に南極の大自然が映し出されているのを。

「へひひ……」

ペンちゃんの小さな胸はいっぱいになりました。ペンババ・ペンママ・ペン兄・ペン太先生・仲間たち・大きな氷・暗い海・吹雪・オーロラ。みんな埋め尽くされて、息が止まりそうになりました。全ての映像がペンちゃんの胸まで流れてきて押し留められました。でも、置いてきたものです。ペンちゃんが望んで、置いてきたものたちなのです。

新宿の一角に、ペンちゃんは立っていました。キラキラした星のような

イヌとペンギン

輝きのネオン、あふれかえる人。海はなくても、へんちゃんは得意な泳ぎでこれらを乗り越えていくのです。

突然、空から何かがハラハラと降ってきてへんちゃんの顔に当たりました。それは雨ではなく、飴のように甘いジュースでした。だんだん顔が濡れてきました。

「日本ってジュースが降るべき？」

するととんとん激しくなってきた、へんちゃんの顔はべたべたになってしまいました。

「気持ち悪いべきー！」

目を開けると、イヌがいました。しっぽを振りながら、へんちゃんを覗き込んでいます。

「へんちゃん、寝てたわら？」

イヌはへんちゃんを挟むようにして、ペンチに前足をかけて立っていました。へんちゃんは顔をひれて拭きながら、言いました。

「こらっ、イヌ！ 顔はなめちゃだめって言ってるべき！」

このイヌがへんちゃんの相棒。まだまだ大式のあいさつが抜けません。

「へんちゃん、遅れてごめんわら」

イヌは特に悪びれる様子もなく、いつもの調子で言いました。

「イヌが遅いから夢を見たべき。日本に来たばかりのときの」

へんちゃんとイヌは日本のとある大学で勉強中。

この物語はへんちゃんとイヌが織りなす不思議なお話。



第二話 アルバイトをする

「いいバイトあるよ」

日本語の授業中、へんちゃん隣の隣に座っていたペンギンがそう言ってきました。同じ南極大学出身の友達です。へんちゃんはアルバイトを探していました。

「へい？」（どんなバイト？）

「すっごく楽なバイト。メシもついてるし。行ってみればわかるよ」

渡された地図を握りしめて、へんちゃんは地下鉄に乗りました。電車のドアが開まる時、シールが貼られているを見つけました。ドアに注意するように促しているシール。かわいらしいポーズでドアを指差しているのはペンギンでした。

「モデルか……」

次にへんちゃんはJRに乗り換えました。改札を通るとき、ペンギンが定期券を薦めていました。簡単に改札を抜られることを紹介しています。

「JRの職員か……」

日本には実にいろいろな仕事があります。へんちゃんは想像してみました。ウェイトレス、ショップの店員、書店の店員、事務、秘書、ペンギン語の先生……。どれもびったりで悩んでしまいます。うきうきしている、いつのまにか駅に到着していました。あわてて電車を降りて、へんちゃんはもう一度地図をよく見ました。目印は公園と池。その途中にアルバ

イト先があります。へんちゃんは歩き出しました。べたべた、べたべた、べたべたべた。

公園を通り過ぎ、池が遠くに見える場所にへんちゃんは立っていました。
「……上野動物園？」

へんちゃんが紹介された場所は動物園だったのです。入り口に立っていると、いろいろな動物の鳴き声が聞こえてきました。ガオーツ、パオーン、シュルシュルシュル。その中をへんちゃんは歩いて行きました。べたべた、べたべたべたべた。

へんちゃんは動物園の世界に驚きました。世界各地にちらばっている動物たちが、一同につとっているではありませんか。へんちゃんはアルバイトのことをすっかり忘れて、動物たちにあいさつをしにまわりました。

「こんにちは。ペンギンのへんちゃんです」

へんちゃんは片ひれを高く上げて、みんなにあいさつをします。

すると、木の上にいるテナガザルが降りてきてバナナを渡してきました。バンダが笹をプレゼントしようとしていました。シマウマが背中に乗るように言いました。アリの長い口をへんちゃんのくちばしに近づけてきました。へんちゃんはみんなの優しい歓迎に大満足です。

「次はどんな動物さんがいるべき？」

次の檻にいたのは、百獣の王ライオンです。へんちゃんはまた同じよう

僕とペンギン

にあいさつをしました。体の小さなへんちゃんは、できるだけ高くひれを上げてすぐ見えるようにしました。

「こんにちは！」

すると、遠くにいたライオンはぎろっとうちを睨みました。そして、へんちゃんのもとに近づいてきます。ゆっくりと片足ずつ、リズムよく歩いてきます。

檻のぎりぎりのところまでやって来ると、ライオンは言いました。

「誰だ、オマエ」

「ペンギンのへんちゃんです。今日、アルバイトの面接に来ました」

ライオンはぐるりと辺りを見回しました。大きな目が一周してまたへんちゃんの顔に戻りました。

「グルグルグルグル、この檻から今すぐ離れろ！ ほらっ、すぐに！ ガオーッ！」

ライオンの吼える声が園中に響き渡ります。ライオンの気迫が風になってへんちゃんの毛を揺らしました。へんちゃんは驚いて、あわてて走り出しました。足がもつれて時々転びながら、とんとん前へ前へ走ります。

「東だっ、東へ走れ！ ほらっ！ ガオーッ！」

ライオンの声が背中から聞こえてきます。へんちゃんは急いで東へ走りました。へだへだへだへだへだへだ、コテッ、へだへだへだへだコテッ、へだへだへだ。入り口の方向でした。今来た道を急いで引き返しているのです。動物園のみんながへんちゃんのことを見えています。びゅんびゅん風を切っていると、オランウータンがへんちゃんめがけてフンを投げつけてきました。

「びぎっ」

へんちゃんはそれをかわしたとき、体のバランスを崩し道を右に曲がりました。夢中で走り続けました。

ドンッ！

へんちゃんは突然何かにぶつかりました。それは園長室のドアです。中から、白いひげの園長が出てきました。

「時間ぴったりですね。待っていましたよ」

時間にルーズなへんちゃんは、すっかり面接の時間を忘れていました。

ライオンは動物園のリーダーです。園内の時計を確認して、へんちゃんを急がせるためにわざと冷たく吼えたのです。賢いオランウータンは副リーダー。夢中で突進しているへんちゃんを園長室へと導いたのです。へんちゃんはさっそくみんなに助けられながら、なんとか園長室にたどり着くことができました。

そして、面接が始まりました。南極大学のことやいま通っている大学のこと、好きな食べ物や嫌いな食べ物、走る速さや飛べる距離など、実にくさんの質問をされました。

「じゃあ、今日は閉園までアルバイトをしてみようかな。それで様子を見てから、採用するかは決めましょう」

へんちゃんは今日一日、動物園で働くことになりました。そこで、へんちゃんは新しい友達を作ることになります。それはまた、次のお話。

自伝的小節

小節
詠人不知

INTRO

ま・・、マイクチェックワンツー、日の丸産。死して土にカエルなら生。せいやあせいやあと声を駆らせ、俺は俺の音を成らせ。

るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

五線譜の隙間で、おたまじゃくしが吠えている。シャープでもなければフラットでもない、何者でもないバカ者のバラッド。今宵もまた謎のマークを掲げた六畳の独房で、芯の折れない鉛の筆を握り、『今』を書き殴り、ビートの海を泳ぐ。・・いや、もがく。

バカがバカなりに必死でね、必死とは必ず死やからね。そりや、アップアップや。

ボクは基本ノホホンと逝きたいのに、もう一人の誰かが異常に急ぎ立てる。

『よう、OUTLAW、調子はどうや？ そろそろ俺に代われちや、

アホンダラ。んな、チンタラチンタラやつて、時間がねんちや、よう。』

『いやいや、キミが、その何？ アストロー・・、だか何か知らんけど、それでしょ？ もう自伝的小節は読まれ始めとるんよ。』

『なんや、それ？ 自伝的小説？ しょくもない。お前が何したつち言うんかちや。いつも揉め事の後始末は俺ばっかやねえか。お前はそれを笑いのネタにしようだけやろがい！』

『そ、そうやけども・・。あ、あんたが色々と面倒な事を巻き起こすけやろくも。こ、この、と、トラブルメーカー！』

『あん？ 虎？ 俺は狼や。お前は羊やろが、かっかっか。しょぼいの。男たるもんはな〜』

『さ、さ、自伝的小節を始めましょ。』

ヤニで黄ばんだページをめぐり返してみる事にする。

第零小節

一九七九年、昭和五十四年二月二十四日、福岡県某所に生まれたという記録はあるが、記憶はない・・・。

うりやく。

つづく・・・。



詠人不知（よみびとしらず）

一九七九（昭和五四）年、福岡生れ。零歳の時の記憶はない。平成元年、『魁！ 名島塾』で日本推理サスペンス大賞を惜しくも逃す。平成二年、『続！ 名島塾』で日本推理作家賞の締切に間に合わず、落選。平成十八年、『帰ってきた！ 名島塾』で自らの努力賞を予え、ご褒美に一人で寿司を食べに行くも、店が休業日だった。平成二十年、『自伝的小節』でついに作家デビュー！。

オギヤク。

雑誌のタイトルボツ案

- ・新新潮
- ・文藝夏冬
- ・雑種倶楽部
- ・玉手箱
- ・筆箱
- ・日本アンダーグラウンド文学
- ・燭光
- ・灯火
- ・風福岡
- ・伝書鳩
- ・マル秘文献
- ・文芸復興
- ・無名文豪集
- ・国語自転
- ・ペン〉 剣
- ・文学一座軌跡の記録
- ・豪街(GOUGAI)
- ・無名塾
- ・集団部屋
- ・真我人
- ・真我陣
- ・バカちんマガジン
- ・自由紙
- ・時勇士
- ・LITERARY ART WAR
- ・文藝バトルロワイアル
- ・CHECK!
- ・今売れてます
- ・完売宣言
- ・コレヲヨンデハイケマセン
- ・閲覧禁止
- ・非公開書物
- ・最重要文学財
- ・ニューホライズン
- ・国語!
- ・芥川賞受賞しそうな本
- ・夏目書籍
- ・わが輩は本である
- ・文学のすすめ
- ・チェーンブック
- ・怪文集
- ・鉛筆原理主義組織『有るか異だ』
- ・文藝テロリズム
- ・文藝王国
- ・日の丸文庫
- ・読まないで死ぬ本
- ・デスブック
- ・無題
- ・レア
- ・限定本〜残りわずか〜
- ・平凡非本
- ・本のままにわがままにボクは本だけを傷つけない
- ・文藝タンポポ
- ・文藝そよ風
- ・この本、凶暴につき
- ・百花繚乱
- ・十人十色
- ・ミステリーサークル
- ・読み処
- ・文部省推薦予定作品集
- ・アポロ
- ・ロマン
- ・星屑書籍
- ・星空書房
- ・一番星
- ・本気(マジ)
- ・ノホ本
- ・日本
- ・大日本
- ・本日本
- ・本本本!
- ・読者参加型バラエティ一文集
- ・筆豆
- ・文学愚連隊
- ・夢限大
- ・百鬼夜行
- ・文学の証明
- ・我流
- ・赤紙
- ・闇鍋
- ・処方箋
- ・名島OUT本

鳩山 × 一路 サブカル対談

第1回



私たち2人が
映画・小説・漫画等について
好き勝手に語ります。

記念すべき第1回は
韓国映画「春の日のクマは好きですか？」
です。

「あらすじ」

ヨン・イ監督『春の日のクマは好きですか？』
(原題『SPRING BEARS LOVE』) 1100三年製作

少々ズレた言動のせいで恋人のいないヒョンチエ(ペ・ドゥナ)は、いつかすてきな王子様が現れると信じていた。そんなある日、彼女は図書館の美術書に書き込まれた愛のメッセージを発見。次に借りた美術書でも書き込みを見つけ、自分への愛の告白だと思いつ込んだ彼女は、ヴィンセントと名乗る書き手の男性探しに夢中になる。そんな時、彼女は高校の同級生ドンハ(キム・ナムジン)と偶然に再会する。ヒョンチエに好意を持っていたドンハは、思いを伝えようとするが、

鳩山：とりあえず見終わりましたね。

一路：どうだった？

鳩山：想像以上に『アメリ』だった。

一路：普通に面白かったよね。

鳩山：ペ・ドゥナがかわいかった！

一路：映像がきれいだったな。色とかオーピングの感じとか。

鳩山：「春の日のクマ」って村上春樹から取ってるって思ったけど、直接は出てこなかったね。

一路：そういうえば、ドンハがチエ・ホンマンに似てた。出てくる女性は全員かわいかったんだけど、男性陣がちょっと……。

鳩山：ドンハは日本人に例えると、佐藤隆太的なポジションなんじゃない？ あと、ペ・ドウナのバジヤマ姿がかわいくて、私もかわいいバジヤマを着て寝ようと思った。

一路：大きいズボン履いてたところとかかわいかったよね。ブンブン振り回したりして。鳩山：人と人の距離が近かったことが印象的だった。女の子同士で普通にご飯食べてるときとか。お父さんと娘と一緒にベッドで寝転んでたり。

一路：うちはそれ普通だったかも(笑)
鳩山：話変わるけど、アメリカのラストシーンってベッドシーンで終わるんだよね。乙女チック映画のわりに。

一路：だから、私も最後までなるか気になったんだけど、キスシーンもなかったよね

鳩山：なかったね。文化の違いが表れてるね。

一路：だけど、親密性は表せてた気がする。

鳩山：うんうん。

「妄想と現実」

一路：展開的にはベタな感じがしたけど。

鳩山：「妄想か現実かって話が典型的だと思った。典型的な一つの、女の子を主人公にした恋愛映画のテーマとして。

一路：妄想から恋に、みたいな。でも、それが『アメリカ』とは違って、「現実」がメインだったよね。妄想もしてるんだけど、大半の映像が現実じゃん。「現実」っていうか、結局昔仲良かった人と恋愛してて。

鳩山：「妄想」から目覚めて「現実」を見なきゃいけないみたいなテーマが世界共通なんだなって思った。『7月24日通りのクリスマス』^①を観ただけで、あれはもつと分かる。

りやすくしてて、「憧れの先輩」か「仲の良い幼なじみか」って。要はあれが典型的なテーマってことじゃん。それが日本人だけじゃないっていうのがまず一つあるよね。だって、フランス人とか韓国人とかともそのテーマで話せるわけだよ。

一路：そうだね。

鳩山：私の作った映画も、結局一緒に「妄想」から抜け出すっていうのが一応テーマなんだよね。だけど、それ作ったのが二十一くらいで、十六歳の子が書けばいいけど、二十じゃ遅すぎるみたいなことを言われた。

一路：それ、別に関係くない？
鳩山：それで、主人公を大学生から高校生に変えたの。

一路：最初大学生だったんだ。設定が。
鳩山：そう。

一路：でもさ、今日の映画の女の子の人なんて働いてるんだからね(笑)……ってか、それ言ったの男の人でしょ？

鳩山：男の人。

一路：やっぱり。「妄想」って若い子だけじゃないんだよ。女性にとってもさ。だって、おばさんたちが韓流スターに憧れるのも、ある意

^① 村上正典監督『7月24日通りのクリスマス』二〇〇六年製作

味妄想よね。だから、どの年代にとつてもあると思うんだけど。「世界共通にして、世代共通」っていうか。

鳩山：そうだね。だけど、その「世界共通にして、世代共通」の何かを「妄想」って言葉で表しているのかな。言葉が違う気がする。「現実」と対比される何かだよ。さっきも言ったけど、「現実」って「虚構」もはらんで、「現実」なんだよね。本当は対比されないだよ。

一路：現実自体が虚構ってこと？

鳩山：たとえば、同じ人でもその人が「自分」はみんなに好かれてる「って考えてるのと、「自分はみんなに嫌われてる」って考えてるのとは、現実の人間関係も変わってくるじゃん。だから、みんなに嫌われた結果「みんなに嫌われてる」と思ってるのか、「みんなに嫌われてる」って思ってるからみんなに嫌われるのか分からないよね。だから、「現実」と「思いこみ」をきれいに分けることはできないよね。

一路：できないね。特に恋愛だと、恋愛自体が妄想みたいなところあるじゃん。こう、シチュエーションを作ったりとか。普通に付

き合つても、少し妄想がかつてるよね。恋愛ってことをテーマにした時点で、もう「妄想と現実」のテーマに落ちるのかなって思った。

鳩山：「妄想をやめなきゃいけない」っていうプレッシャーがかかっているっていうのはあるよね。だけど、本当に妄想をやめてしまったら恋愛なんてできない。だから、二重の「妄想と現実」があるんだよね。

一路：だからまずは「妄想」から抜け出て。

鳩山：で、新たな「妄想」に入る。

一路：そう、新たな「妄想」を二人で作ります。一人の妄想からね。

「文化系女子の恋愛」

一路：やっぱり女性は顔はあんまり関係ない感じがするんだよね。顔で選んでる感じがなくて。だけど、男性は女性を顔で選んでる感じがして。だからこそ、男性は押しが強い方が最終的にはうまくいくよね。「この人でいいや」って女性が思ってくる。だから男性の方が得だよ。

鳩山：男性は、学生時代とかはだめでも、仕事で成功すれば絶対誰かしらは寄ってくるじゃん。だけど、女の人は生まれもったものを求められる率が高くて、努力の余地が少ないってことは挙げたい。

一路：少ないね。それは前からそう思ってたんだけど、最近気付いたんだけど、男性はきれいな人が好みの人もいれば、逆に「きれいな人が好みの人」もいるよね。

鳩山：そうかな。まあ価値観は一つじゃないよね。もう二六にもなったら、顔がすべてとは思わない。だって、どんな女の子でも恋人はいるじゃん。だから、顔がダメだから自分はダメだとは思えないよ。この年になったら。だけど、みんな言うよね。好みはいろいろって。

一路：だから、意外なタイプが好みの人もいるんだよね。世の中には。

鳩山：それは否定できないね。

一路：だけど、それにうまいこと巡り合わなきゃいけないっていうのが難しい。

鳩山：あと、好きな人がどんどん好みになっていくっていうのもある。

一路：フェチっていうか、トラウマ的な？

鳩山：例えば、好きな人がいて、ある日「

の人っていい声だなんて気付いたりする。で、私はいい声の人が好きなんだって思って、その後声フェチになっていく……みたいな。

一路：その説もあり得るね。

鳩山：それはどうちもあり得るよね。みんなの好みが一緒じゃないから、自分がどういう特性を持っていたとしても、「これだから自分はだめだ」とは言えないじゃん？ だけど、やっぱり「似てる人を好きになる」っていう……。

一路：「一路説」？

鳩山：(笑)「一路説」に大賛成なんだけどさ。だって大学の時、楽だっただよな。

一路：似てる人がいっぱいいて？

鳩山：「合わせなきやいけな」とか思わないし、話すレベルが今とは全然違う段階にいて。そういう気が合う人とはばかり一緒にいちゃいけないって思って、大学時代の友達は一切ろっつてなっちゃったんだけど。だから、巡り合うのは難しいなって思ってるよ。

一路：そういう似た人って？ それって友達

の話？

鳩山：友達も、恋人も。

一路：えっ、そうなの？

鳩山：いないなって思った。

一路：付き合える人が？(笑)

鳩山：だって、当り前だったんだよね。もうちよつと前提が共有できるところがスタートで。

一路：私もそれすごい思う。こないだ友達が学生運動の話をして始めて、私はそれすごいハマるポイントなの。『実録・連合赤軍』のパンフレットを買うぐらい。それで、右翼か左翼かって話になったんだけど、私が「あれは左だと思っよ」って言ったら、そこで「あっそうなんだ」ってぶちつと終わっちゃったの。でもさ、たぶん前付き合ってた人とかだと、「今の日本とアメリカは……」みたいな話までは一つといくんだらうと思うのね。でもいかないで、ぶちつと終わるのって何だかなあつて。

鳩山：うんうん。

一路：だけども、今日の映画を観て、ああ

いう「僕は映画も観ないし、絵も分からない」みたいな。

鳩山：「パイロットでもない。だけど愛してる」みたいな(笑)

一路：そう。だけど、あの女の人も結局くついちやうじゃん。そこから何かを学ばないといけないなって思ったの。似た人っていうか、「この話したい」って思ったときに、同じぐらいについてくれる人じゃない人の方が……、っていうか、ついてくれる人じゃない人も一緒にやっていきたくて思って。

鳩山：「じゃない人の方が」とまでは言えないよね。

一路：絶対言えないけど。

鳩山：絶対言えないけど、そこで切っちゃったら、あまりにも間口が狭すぎる。

一路：いなすぎるよね。探すのが大変。鳩山さんと取り合いそうよね(笑)お互い数人しか見つけられなくて、どれにしようかみたいなの。

鳩山：どれにしようかっていうか、言うまでもないかもね。一人かもよ。取り合うしかないよ。

一路：取り合いだね(笑)

②「一路説」恋人や夫婦は似てくるわけではなく、最初から似てる人を選んでるから似ているのだという、一路が頻繁に主張する説。

③若松孝二『実録・連合赤軍 あさま山荘への道程(みち)』二〇〇七年製作

鳩山：スポーツ好きな感じとか、共有してあげられないもんね。

一路：共有は無理だよ。まあ観戦ぐらいならね。観に行つてお茶を出すぐらいならできるよね。

鳩山：あー、結構えらいね。

一路：えつできない？一緒にやろうつて言つたら断るけど。

鳩山：好きな人だからでしょう？

一路：まあ好きじゃないと観に行かないよね。

鳩山：本来、自分だつてその時間で、もっと勉強とか短歌書いたり、小説書いたり、そういう方が正しいんじゃないかと思つてしまふな。

一路：まあそうかもしれないけど、でも、

私は男友達を観に来てつて言つたら観に行くよ。

鳩山：私も行くと思う。

一路：行くでしょう？(笑) たぶん断つて短歌は書かないと思うよ。

鳩山：ぼーっと観ながら短歌のことは考えてると思うよ。

一路：ああ、それは思想の自由を活かして

るよね。

鳩山：心の中はね。

一路：そこが、短歌とか小説とかの良いところだと思つて。

鳩山：そう。どんな経験もプラスにできるよね。

一路：活かせるね。

鳩山：表現できる何かを持つてると良いよね。つていうか持つてないと逆に辛い思いも、辛かつたで終わるからね。

一路：ヤクルトの古田も、ブログを書き始めて毎日が楽しくなつたつて言つた。何か失敗しても、ブログにネタとして書けるつて思えるから良いつて。

鳩山：ほんとその通りだよ。

「好きになつてくれる人が好き？」

一路：映画の途中で思つただけで、「好き」つて言われたら好きになつちゃうんだなつて。

鳩山：そうよね。私もそこが核心だなつて

思つた。

一路：核心かどうかはわからないけど(笑)

でも、相手が自分のこと「好き」つて感じたら、好きになつてるよね。本の人のときも、研修の人のときもね。

鳩山：結局、ヴィンセントと聞いて喜んで好きになつてる。何でヴィンセントを好きかつていうと、「こんな良いところのない私を好きつて言つてくれたから」つて。もし、考えたらそこかなくなつて思つた。結局、自分を愛したいんだよね。だから、自分を愛した人を結局好きになる。

一路：そのことずつと考えてただけど、高校のときの寄せ書きのカードみたいなやつで、「好きなタイプは？」つて質問に「自分を好きになつてくれる人」つて書いた人が友達に二人ぐらいいて、その意味が私は理解できなかったんだよ。私はタイプがはっきりしてるから、好きになつてくれる人が好きつて理解できなかったんだよ。でも、今日の映画みたいなことなんだよね。

鳩山：完全に私がそうだもん。

一路：好きになつてくれる人が好き？(笑) まあそれが幸せだよ。追いかけるつていうよりは、追われて……みたいな。

鳩山：心が閉じてるんだらうね。

一路：閉じてんの？(笑)

鳩山：お笑い芸人の好きなタイプを挙げ
るって番組で、ブラックマヨネーズの小杉と
かは「顔、スタイル、フィーリング」とかを挙
げてるのに、今田耕司が「自分を好きになっ
てくれる人」って書いてたんだよね。それで、
心理学の先生が来て、それを書く人は心が
弱いみたいなのを言ってる。相手のリアク
ションが平気な人がいるんだよね。

一路：何人にもアタックできる人とかね。
でも、そうじゃなくて待ちつていうか。待つ
てる人にとっては自分を好きになってくれる
かどうかんだらうね。

鳩山：だから、自己評価が低いつて言っ
たらそれまでなんだけど。ただ、女の人にフラ
れたつてだけじゃなくて、全否定されたみ
たいな、一個一個が重くのしかかるんだら
うね。そういう人にとっては。うかつに動け
なくなるつていうか。ただ、相対的に見たら
どうだらうね。みんな自分を好きになつて
くれる人が好きでしょ。

一路：ちっちゃいときの恋愛とかそうだよ
ね。〇〇君が好きつて言つてたよとか言わ

れたら、気になるじゃん。そこが原点なの
なつて。人間のさ。

鳩山：だけど、主に女の人がある傾向が強
いのかなつて思う。女の方は「まあいいか」つ
てなつてさ。なんか言つてみたら悲しいよね。
選んでないんだもんね。

一路：でもさ、でも、押されたからつて絶
対いけるとは限らないじゃん。押されて良い
範囲と、ちよつとね……。

鳩山：それはあるけど。まったく取捨選択
してないわけじゃないよね。だけど、身軽に
バンバンいける人がうらやましくもある。
一路：まあね。鈍いつていうか傷がつかない
んだらうね。

「片思いが世の中から消える？」

一路：映画のなかで、自転車で走つて行つ
たよね。女の人がラーメン食べたつて言つて。

鳩山：夜中に走り出したつてことはす
ごく思つた(笑)

一路：男の人つて「こういうところあるんだ
なつてね。夜中にやつば「来て」つて言われた

ら走つちやうんだなつて思つて。

鳩山：だけど、女の人最後走るじゃん。
泣きながら。つてか、ドラマつて基本走るじ
ゃん。

一路：走るね。

鳩山：人はみな走りたつてんだなつてことは
すごく思う。人生で一回ぐらひは走りたつて
一路：思い余つて走りたつていよね。

鳩山：そうそう、なんか「走るぞ」つて感じ
じゃなくて、「走らざるを得ない」みたいなの
感じて走りたつていよね。

一路：そうだね(笑)

鳩山：片思いつてしなくなると思わない？
男の人が片思いしてたじゃん、ずっと。あ
あいうのないよね。夜中に走り出すのと一
緒で。

一路：私、昔から本気で片思いしたことな
い気がする。すぐ現実が見えるんだよね。

すこい好きつて思つても、何か合わない部分
とかいやな部分があると一気に冷めてしま
うから。だから、同じクラスじゃないとか、
別世界にいるような人の方が片思いは持続
するかな。

鳩山：現実世界では、片思いつてあんまり

ないんじゃないかなって思う。

一路：そうなのかな？

鳩山：「ハチクロ」が流行ったのは、片思いつという現象自体が新鮮だったんじゃないかと私は思ってる。あれって意外に、はぐたちじゃなくて山田さんと真山のあつちに共感してる人が多いと思う。

一路：私もそう。

鳩山：意外に、核はあそこなんだと思う。

一路：その切なさが伝わりやすいんだよね。

鳩山：それを思うと、叶わない方が共感するっていうか、そういう経験があるってことなんだよね。

一路：あの話は、みんなが経験してるからっていうか、普通に共感できるんじゃないかと思うんだけど。まああそこが核だよ。

鳩山：他の友達はあるを見て「片思いつ」がなくなったって言って、だからレアな現象だからあんなにハチクロが流行ったって私は感じた。

一路：片思いつがしたいってすいよね。だっでできればしたくないじゃん。だけど、片思

いの方が楽しいとも言うよね。

鳩山：「片思いつが楽しい」って言うてる人の片思いつは、本当の片思いつとは言えないと思う。「片思いつ」みたいなもので。だから、本当の片思いつはやっぱり少ないと思うんだけど……。好きになってくれる人を好きになるっていうのも、そこにかかってくるよね。

一路：好きになってくれる人が好きっていうのは、「両思いになれる」ってことが前提にあるもんね。

鳩山：だから、そういう人が増えれば増えるほど、片思いつという現象はなくなる。

一路：なくなるかもね。でも、逆に自分を好きになつてくれる人が好きっていうのは、自分に自信がなくて自分を肯定したいわけですよ。そういう人が増えるってことは、

すごく淋しいよね。淋しい世の中に片思いつがなくなるってことは、うれしいよね。人はみな淋しいんだけど、でも片思いつはなくなるから、両思いになれてうれしい。そうすると、自分は肯定されるから、また片思いつが出てくる。無限ループだ(笑)

鳩山：食物連鎖の理屈みたいなね(笑)

④羽海野チヲ「ハチミツとクローバー」集英社クイーンズコミック ス、二〇〇二年



憂鬱な水曜日

中山 律子

肩に小さな虫が留まっていることに気がついた。小さくて丸くて緑色に光っている虫。名前は分からない。振り払おうと手を伸ばしかけたが、ふとそのままにしておこうという気になる。肩に虫が貼り付いていたとしても何の害もないし、どうせすぐに飛んでいくのである。

やたらと天気の良い昼休み、非常階段に座って昼食を取っていたところだった。なぜかいつだって人のいない場所を探すのが得意なのだ。いつも同じ弁当を職場で頼むが、これは大変に良いものである。毎日食べるものを自分で考え決めなければならぬのは大変な労力だと思う。しかも本当に食べたいものを食べることができたと考えることは一ヶ月に一度ぐらいのことだ（これはあくまで個人的な意見だが）。一日に三度飯を喰うとして、九十回。そのうち一度というのは大変低い確率だと思う（これもあくまで個人的な感想だ）。九十回。たった一ヶ月で人はそれだけ飯を喰うという事実に愕然とする。一年で千九十五回（生命体として生きる上で、たった一年間にそれだけの選択を迫られるのか）。学校の給食のように毎日のメニューが決められていれば良いのだ。毎月どこから

か「給食だより」が届き、我々は着実にそれを実行する。健康管理も行き届くし、何より考えるという手間が省けるのが良い。自分で考えるから、自分の選択が正解だったのかということが気になるが、与えられたものならそれを素直に受け入れることができるはずだ。

我ながら良い考えである。

さばの味噌煮を咀嚼しながら、ふとまだあの虫が肩に留まっていることに気づく。てんとう虫に似た形をしているがてんとう虫ではない。緑色のてんとう虫など見たことがない（それとも私が知らないだけで、この世界には緑色のてんとう虫というものも存在するのだろうか）。静止しているように見えるが、よく見ると虫は小さく動いている。その表面に光が反射して、虫はきらきらきらきら光っている（子どもの頃はてんとう虫もかまきりも平気で触れたのに、ある日突然それらを触ることを恐怖を覚えるようになった。あれはいつのことだろう）。

昼食を終え、食後の一服を吸おうと喫煙所に向かう。透明な仕切りに囲まれた不思議な箱だ。先月まではこの箱はこの世界に存在しなかった。折からの禁煙ブームの煽りを受け、いつの間にか煙草はこの箱の中で吸うという決まりができた（わたしは決まりを守るのは好きだ）。この箱にも、なるべく人がいないタイルを選んで足を運ぶようにしているが、今日は先客がいた。経理課の中島さんだ。水曜日、水曜日が問題なんだよと中島さんは話し出した。月曜日

と火曜日は良い。休日を過ごして体力が残っているから。金曜日は明日は休みだ。だって思えるし、木曜日は明日は金曜日でその次の日は休みだって思える。だけど水曜日には何も無い。この水曜日をどう乗り切るかってことが問題なんだな。中島さんはゆっくりと煙を吐き出した。わたしは中島さんの肩に目をやった。中島さんの肩には虫は留まっていなかった。

別れ際、中島さんに今日の夕食のメニューを聞く（中島さんは少し考え込んだ。カレーだなと中島さんが言うのでわたしも同じものを食べますとわたしは心の）中でつぶやいた（心の中でつぶやいても相手には届かない）

仕事は単調で地味な作業の連続だ。今日も膨大な資料をいくつかの分類に従って整理する作業に午後の時間を費やす予定である。わたしはこの仕事を気に入っている（自分の席につくと黙々と午後の作業を始める）。コーヒーマシンの匂いが部屋に満ちている。わたしはこの匂いが苦手だ。

仕事を始めて、まず驚いたのはみんながスイッチを持っているということだ。笑顔スイッチ。わたしは同僚のスイッチに名前をつけた。わたしもスイッチをさっそく取り付けてみたが、どうやらわたしのスイッチには不備があるようである（なぜ笑っているのかと度々人に問われる）。要はスイッチを押すタイミングが問題なのだ。ああ。わたしはある事実に気づいて愕然とする（ここでも選択を迫られている）。こうしている間も同僚たちのスイッチは正確に作動しているようで職場

には笑顔が絶えない。わたしはキーボードを叩く自分の手に目をやった。先ほどの虫が中指の先に留まっていることに気づく(ぎよっとした)。あれからどれだけの時間が経ったのだろうか(この世界にぎよっとしたという言葉があるのでわたしはぎよっとすることができる)。先ほどの虫と思ったが、似ているだけで同じ虫とは限らない、という事実気づく。その虫はやはり緑色の光沢を放ちながら、小さく動いている。

その様は、何かを食べているようにも思えた(今日の夕飯は何ですか)。

透明人間になりたいと思っていた。子どもの頃の話ではない(だいたい二十三日ぐらい前の話だ)。これまでの人生における失敗を数え上げ、同じような失敗は二度としないとシュミレーションを繰り返すうちに、わたしが理想とするわたしの姿は透明人間であるという事実思い至ったのである。透明人間は他人に迷惑をかけない。透明人間は他人の評価を受けない。透明人間は失敗をしない(しても誰も気づかない)。しかしそれは不思議なことで、わたしはもともと目立たないので、いまさら透明になることを目指す必要はないのである。いない人として存在することはとても難しいことのように感じて、しかし人はいつでもいない人になれる。例えば誰とも会わずに過ごす日曜日。わたしが確かにこの世界に存在したということをどうやって証明することができるのだろうか(証明を求めるのはわたし自身だ)。それなのにこの後に及んでまだわたしは透明人間

になりたいと考えている。そのことに気づいてわたしは笑ってしまった（透明人間ではなければ、わたしは何になれば良いのだろうか）。

目がとても乾くので、目薬をさす。コンタクトが合っていないのだ。ふと気づくと例の虫が小さな赤ん坊にすりかわっている。赤ん坊は白くてどこもかしこもやわらかい。全身からあたたかな匂いを発し、ゆっくりとまばたきをしている。わたしは思わず辺りを見渡した（誰も気づかない）。恐る恐る赤ん坊に触れてみる。するとそれは確かに小さな赤ん坊なのだった。

わたしはにわかに全身に希望が満ちる（これで全てをやり直すことができる）。生まれ変わることができる（君は何も考えてない）。何も考えていないということ、自信があるということだ。

赤ん坊はするすると大きくなっていき、たちまちわたしの目の前を覆うほどの大きさになって机の上をころころ転がり始めた。わたしは慌てる。ここは仕事場で、わたしたちは仕事をしていて、赤ん坊に机の上を転がられたら困るので、とわたしは慌てて説明を始める。赤ん坊は目を開く。赤ん坊はわたしの方にゆっくり向き直ると小首を傾げて問いかけてきた（あなたは何を怖がっているのか）。突然の質問にわたしはますます慌ててしまう（しかし質問はいつも突然なものだ）。

分からない。

分からないんです。

それが精一杯の答えなのだった。

終業の時間になり、わたしはパソコンの電源を切り、席を立つ。コートを着て家に帰る支度をする（今日はカレーを食べるんだ）。ふと肩に目をやるが、もうあの虫はいなかった。

マチコ先生に訊け！

マチコ先生に訊け！

第1回

皆さんのお悩みに、愛の伝道師（自称：大橋の姐）
マチコ先生がお答えします。



▲遂にクマへのスピリチュアルカウンセリングに成功したマチコ先生（国内初）

Q：職場の上司（オヤジ）ウケを良くするには、
どうしたらいいですか？

マチコ先生：カワイイ声を出すことね。「え〜〜ちが
あいますよ〜」みたいな。

鳩山：確かにある一定の年齢を越えたら、見た目より
も声とかリアクションが大事よね。はい、できる人は
手をあげて！

一同………できない。

Q：3キロ痩せたいんですが、どうしたらいい
ですか？

マチコ先生：痩せなくて大丈夫だって。ケーキバ
イキングに行こーよ！

Q：なで肩になるにはどうしたらいいですか？

一路：肩に重い荷物をかけたらいんじゃない？

マチコ先生：悟空のやつみたいだね。

鳩山：もしくは、マサルさんみたいなやつでもいいか
も。

マチコ先生：でもあれつけてるとき、めっちゃ肩いか
つてるよね。

鳩山：でも最終的にはなるんでしょ。なで肩養成ギブ
スだし。

Q：彼女がいる男性を奪うにはどうしたらいい
ですか？

マチコ先生：それは汚いやり方じゃないわね……。
MMWのサチコみたいになればいいのよ。

一路：あく終電を逃させたり？

マチコ先生：見え見えて分かってるんだけど、既
成事実を作って………みたいだね。なのに自分可哀想
みたいに持っていけばいいと思うよ。

鳩山：サチコのポイントは、悪気がないってところ
なんだよね。計算でサチコだったらダメで、素であ
れなんだよ。だけど素で計算高くなれないからね。
難しい。

マチコ先生：つまり、才能ってことね。

鳩山：そう。結論、才能。

Q：素敵な男性と巡り会うには、どうしたら
いいですか？

マチコ先生：う〜ん、あなたのオーラの色は……。

オーラの色が分かるっていう本があるんだけど。質
問に答えるだけだけど、こんなんに分かられてたま
るかって感じの。

一路：すごい簡単じゃん！ やりたい！

鳩山：（本を開く）一問目。ブツダよりキリストの方
が好きだ。

一路：分らない！（笑）

鳩山：こんなものもあるよ。ユーマンとチャゲアスな
らチャゲアスの方が好きだ。

マチコ先生：キリストとチャゲアスが同列の質問に
あるっていうね（笑）

鳩山：ところで、オーラでどう出会うの？

マチコ先生：あ、関係なかった……。



大学を出て塾講師として働き始めたとき、私はいきにおばさんになった。

生徒はみんな子ども。一緒に働く講師もバイトばかりで全員年下。若いかわからないかなんて相対的なものなので、14歳の女子中学生などと比べたら、当時22歳だった私は自ずと「終わってる」ということに相成ったのだった。

特に子どもたちは私の年齢をよくネタにした。「ナカヤマ先生の年齢なんて怖くて教えられない」と自分より十も年上の男性講師が生徒に話しているのを聞いて、怒りに打ち震えたりもした。

私は自分の年齢を恥ずかしくなんて思っていなかった。だけど、年を重ねることで、ただ年を取っているというだけで誰かに馬鹿にされるようなことがあるんだと知って憂鬱になったのも事実だった。

一方で、年の離れた人とデートをして、どうも彼は私が若いということだけに価値を見出しているのでは？と思わされるようなこともあった。その人が、ひそかに年より若く見えることを自慢に思っていることも、若い子扱いされてちょっとうれしい自分も悲しかった。年を取ることを嫌がりながら生きるのは悲しい。私はそう思った。

だけど今考えれば、社会人になったことで自分の年齢を意識し出したのは、自然なことだったのかもしれない。学生時代は、周囲に同世代しかいない世界の中で生きていた。それが社会人になることで、年上にしろ年下にしろ幅広い年齢層の人との関わりが生まれる。世界が広がった結果だと思えば、年齢を意識するようになったことも悪くないことのように思える。

友人とこんな話をしたことがある。永遠の命が手に入るなら、永遠に生きることを選ぶか？ また選ぶとしたら、何歳で自分の年齢を止めるか？

その時の話では、全員が永遠の命なんてほしくないと言っていた。じゃあ自分の寿命分だけ生きるけど、年齢は好きなところで止められるとしたらいくつで止めるか？と誰かが言い出して、それにはそれぞれ色々な意見が出ていた。せっかくだから若くて一番いい時期のままで、なんて考えるけど、社会で生きていく上ではそれなりに自由が利く年齢の方が便利だ。結局どんな年齢でも、それぞれの苦勞とそれぞれの楽しさがあって、自分にとって一番居心地の良い年齢というのは人によっても状況によっても違う、というのがなんとなくの結論だった。

人間は自動的に年を取るが、自動的に大人になることができるわけではない。(そもそも何をもって大人になったというのか、という問題もあるが。)社会の中で生きる上で、年齢ごとにクリアしなければならないノルマがあって、何となくそれをクリアしたり、クリアできなくても何とかなる道を探したりしながら人は生きているのだと思う。(たとえば子供のうちは学校に行ってそれなりに上手くやらなければならない、とか、ある年齢で就職したり結婚したりするとか。)大人か子どもかという問題は要は、年齢ごとに課されたノルマと本人との距離の問題なのかもしれない。

だとしたら、大人になることと子どものままでいること、どちらが大変なのだろう。

大人なんてまぼろしみたいなもので、いくつになっても中身は変わらないと言う人もいるが、私はやっぱり人は変わっていくものだと思う。頭の先から足の先まで下ネタしか詰まっていない中2男子たちが、真剣に結婚したら奥さんとセックスするかどうか、という議題について話し合っているのを聞いて以来、私は確信した。やっぱりそうか。あそこにはもう戻れないんだな。

だけど最近変わっていくのも悪くないと思う。大人になるってことが色んなことを知ることなら、それはすごく楽しいことなんじゃないだろうかという気持ちが頭の先っぽに沸いている。転職をしたことで色んな大人たちと関わる機会が増えて、大人の世界を垣間見たからだろうか。社会に出て、色々大変ながらも何だか楽しそうに生きている大人たちに出会えたことはとても幸福なことなのかもしれない。

とりあえず、年齢というある意味外的な要因に、できれば振り回されるのではなく、置いていかれたり追い越したりわき道に逸れたりしながら、ちょっとずつ成長していきたいと思うこのごろです。

HOW OLD ARE YOU ?



シュウエン

一路真実

1

遠くの山を黒い鳥の群れが飛んでいく。紅い空に似合わないような、群青色の雲がそれを追うかのように流れていた。

大きなものが落ちるような音を聞いて、みんなははっと顔を見合わせた。

「何、今の音？」

「準備室の方からだよ」

一斉にさっと立ち上がると、準備室のドアノブに手をかけようとした。

「……最後に準備室に入ったのは？」

みんなは目を見合わせた。その答えはすでに頭の中に浮かんでいるようであった。互いを窺うように顔を合わせ、誰かがその名前を言うのを待っていた。言つてよ、というように誰かが少しあごを上げた。

「園田さんでしょ」

再び準備室から雪崩が起きたかのような音が鳴り響き、驚いた少女たちは一斉にドアを押して中へと流れ込んだ。

ほこりが部屋中を舞い、窓からの紅い光をきらきらと反射させている。積み重なった黒いケースがぐらりと動き、また小さな雪崩を起こした。

「大丈夫？」

声をかけると、黒い山の中から頭がゆっくりと出てきた。

「……ごめん、また仕事増やしちゃった」

床にべたんと座りこみ、頭のたんこぶをさすりながら振り返った彼女は、にこにこことほほ笑んでいた。

園田さんがゆかりのクラスに転校してきたのは半年前で、ゆかりのいる書道部に入ると言い出したのは三か月前だった。先生に転校生として紹介された園田さんは、まるでマリア様のように優しくほほ笑み、すぐクラスのみんなに溶け込んだ。彼女の出すオーラは周りの人々を寄せ付けやすく、休み時間の度に入れ替わり立ち替わり彼女の周りに人が集まった。

りの人々を寄せ付けやすく、休み時間の度に入れ替わり立ち替わり彼女の周りに人が集まった。

ゆかりもその一人だった。話しかけようにも、なかなか彼女の周りから人が絶えず、ホームルームの後まで順番を待った。園田さんの体の内側から湧き出すほかほかする雰囲気、ようやく番が回ってきたゆかりはいつもより饒舌に話した。下校時間が過ぎ、クラスの人々がだんだんといなくなったが、最後まで園田さんはただ頷きながら聞いていた。

偶然にも園田さんとゆかりの家が近いことが分かり、二人は一緒に帰ることになった。ほとんどの時間をゆかりが話し、園田さんはただ相槌を入れながら聞いていた。今から思えば、園田さんを取り囲んだ連中はみなそうだったことに早く気付くべきだったのである。中学校の古株としていろいろ教えたい気持ちを抑えておけば、彼女のその後の変な言動に巻き込まれずにすんだのだ。

ゆかりと園田さんの家は丁字路を左右別々の方向に曲がっていき、ちょうど数メートル歩いた距離にあった。

「こんな近くなんてすごいね。これからも仲良くしようね」

二人が別々の方へと歩むその角で、ゆかりは頬を赤くして言った。目をいっぱい開いて園田さんを見つめた。園田さんはこりとほほ笑むと、

「ゆかりちゃん、ユーカーリ」

と、二人のそばにあった塀の上を指差した。しかし、そこから顔を出していたのは、柿の木である。

「園田さん、あれはユーカーリじゃなくて、柿の木だよ。だって、実もなってるじゃ……」

ゆかりの話をさえぎるように、突然園田さんは塀をよじ登り始めた。

「ダメだよ、園田さん」

しかし、園田さんはやめようとしなかった。塀に何度も足をかけるが、何度も滑り落ちる。その度に膝を塀にこすするため、皮が少しずつ剥け赤く染まっていた。

ゆかりはその様子を見ていた。はじめは塀を登るなんてダメだと思ったが、園田さんの様子は塀を登るといふよりは、どう見ても塀に膝を擦り当てているようにしか見えなかった。体が上がらないのだ。右足を数センチ上げて塀にあてがい、左足を数ミリ浮かすとすぐに右足がずり落ち、右膝を塀にこすりつける。その作業を何かの儀式のように、何度も繰り返す彼女を見ているうちに、ゆかりはなぜか園田さんを助けたくなった。

「いいよ、私がやるから」

ゆかりは、軽々と塀によじ登り、塀の上にまたがって座った。

「で、園田さん、何がしたかったの？」

上から見下ろすように、ゆかりは言った。園田さんは、下からこりとほほ笑むと、

「ゆかりちゃんの靴、あたしが持つてる靴とおそろい」と、叫んだ。

あの一件以来、ゆかりは園田さんをよく観察するようになった。そして、気付けばよく一緒に行動するようになった。

「園田さん、次の授業は視聴覚室だつてよ」

教科書を持って移動しようとしているゆかりを見て、園田さんは言った。

「教科書を小脇に抱えたら邪魔でしょ」

すると、突然彼女は髪を結んでいたリボンをはほどき、ゆかりの教科書を奪った。リボンを敷き、その上に教科書載せる。リボンを絡ませると、ひっくり返した。しかし、ひっくり返すと同時に教科書が滑り落ちて、リボンから抜けてしまう。もう一度、リボンを机

張を始める。しかし、それが全く他の人に伝わらない。とても不器用なのだ。そして、他の人がそれをやっていると突然興味を失う。自分が取り組んでいるということが重要なのだ。

ゆかりはこういうことが何度もあり、少々園田さんに嫌気が差していた。しかし、数週間経っても、相変わらず園田さんに話しかける人は減らなかった。他の人は園田さんを不思議な人物であると認識していないのだ。ある時、園田さんがゆかりの机の前に来て言った。

「やっぱり、ゆかりちゃんが一番話しやすい」

その言葉で気付いたのだが、園田さんは他の人から話しかけられてはいるが、自分から話すことはほとんどしていないようだった。聞いているのかいないのかは定かではないが、自己主張することなくほほ笑んで頷いている。しかし、ゆかりに対しては別だった。だからこそ、ゆかりは迷惑を被るのである。

2

ゆかりが唯一落ち着ける場所は、書道部の部室であった。そこでは園田さんから逃れられる。十分筆を動かした後、片付けを終えるとみんなでおしゃべりをするのが常だ。このおしゃべりをするために、部活動を続けているといっても過言ではない。

まみちちゃんがやにやししながら、ゆかりを指差した。

「ゆかり、そろそろ告白なんじゃないの」

歸りに新作のお菓子を買うかどうかという今までの話題を遮って、唐突に言われたのでゆかりはどぎまぎした。

「うわあ、じゃあサッカー部が終わるの待つちゃう？」

みどりが冗談めかして、隣のゆかりをつついた。

「ちよつと、待つてよ。まだ言えないつてば、まみちちゃんこそ、そろそろじゃないの」

ゆかりが話をそらすと、まみちちゃんは真剣な顔をして両手を胸の前で組んだ。

「そろそろなんだよねえ」

「えー、いつ？ いつ？ 見に行っちゃってもいいのかし

らん

硯を洗い終えた聖美が、ひょっこりドアから顔を出した。「あーちよっと、閉めてっば。誰かに聞こえたらどうするの」

まみちゃんが大きな声で注意した。

「だってえ、廊下に丸聞こえだったよお」

ぶつくりと頬を膨らませて、聖美が硯を手にドアを足で閉めた。

書道部は全部で四人である。先輩も後輩もいないため、ゆかりたちが卒業するまで誰も入部しなければ廃部決定だ。「で、どうすんの？」

全員が円になって座ったところで、盛り上げ役のみどりが急かした。

「まみちゃん、中野に告白するの？」

ゆかりがまみちゃんに顔を近づけた。まみちゃんは伏し目がちに、机に両肘をつけて重たそうに顔を支えた。

「それがさ、三組の遠藤君っているじゃない。みどりの幼なじみの。その遠藤君に彼女ができない限り自分も誰かと付き合うことはないって公言してるんだよね」

「何、それ。ちよっと気色悪いんだけど」

ぱつぱつと発言を斬ったのは聖美だった。足を組み、頬杖をついている。

「こら、聖美。いや、でも何で遠藤なわけ？」

みどりは聖美をたしなめながら、大きな目をさらに見開いてまみちゃんを見つめた。

遠藤君とみどりは家が近く、生まれてからずっと家族ぐるみの付き合いが続いている。しかし、中学生になってからは家族旅行などに出かけても、互いに恥ずかしくなりあまり話をしなくなっていた。

「遠藤とみどりは体を知り合ってる仲だもんね」

聖美が茶化すように言った。みどりは真っ赤になって、聖美の肩を勢いよく叩いた。

「お風呂に入ったことがあるってだけでしょ！」

「もう！ みどりは体が大きいんだから少々手加減してよね」

椅子から落ちそうになった聖美は、華奢な肩をさすりながら

ながら反論した。

ゆかりはグラウンドで響くサッカー部の雑多な声から、好きな人を探していた。まみちゃんがそれに気付く、ゆかりの目の前に手をかざしながら言った。

「ちゃんと聞いているの？」

ゆかりはまみちゃんの手にはんとタツチした。

「聖美だって、遠藤君のお兄ちゃんと付き合ってるんですよ。何か聞いてないの」

聖美は指先についた墨汁のシミをこすりながら言った。

「まあね。でもそれは、中野の問題なんですよ」

まみちゃんにはあと溜息をついた。

「中野って、よく分からないところがあるんだよねなんか男の友情っていうか、遠藤とそういう契約をした、みたいなこと言ってただけだよ」

みどりは首をかしげた。

「じゃあ、私が遠藤に言うっておくよ。契約破棄しなよってさ。そしたらまみちゃん、中野に告白するんでしょ？」

まみちゃんは両手を大きく上げて、伸びをした。

「……うーん、わからない！ 新作のお菓子買えたら考える！」

窓から少しだけ顔を出した木々が黄色に染まり始めていた。冬が近づいている乾いた匂いが、冷たい空気の中に入って来る。みんな帰る支度を始め、ゆかりは窓に手をかけた。いつものようにグラウンドで走る人影を目で追い、ゆつくりと窓の鍵を閉めた。

3

園田さんがくつついてくるようになって、ゆかりは毎日が憂鬱で仕方なかった。みんなが園田さんのおかしな言動に気付いていけば、少しは楽になったかもしれない。誰もゆかりの気持ちをつかかってはくれないし、相談しようものならむしろゆかりの方が変に思われた。

「園田さんって、いつもここにこいて笑ってこつちが癒されるよね」

「お人形みたいな顔で、髪の毛さらさらなんてうらやま

しい」

そんなふうになやほやされる園田さんをゆかりはいらいらしながら見ていた。しかしそれ以上に、そんなふうには嫉妬心を持っている自分自身に対してもやもやとした気持ちを抱いていた。避けようとするほど、暗い顔をしてゆかりに気付いているのか、園田さんはみんなにもてはやされている笑顔でいつも近づいてきた。

ある日の昼休み、ゆかりは急いでお弁当を持って教室を飛び出した。ぼうっとしていたら、園田さんと一緒に弁当を広げなければならなくなるからだ。隣のクラスに飛び込むと、まみちゃんの机の前に座った。

「セーフ」

まみちゃんは広げていた教科書を閉じながら、

「まだチャイム鳴ってから数秒しか経ってないじゃん」

と、ふてぶてしく言った。

「いいの、いいの」

ゆかりは、まみちゃんを作る机の上の隙間に、どんどんお弁当を広げていく。

「ねえ。うしろ」

「え？」

箸を持って今にもおにぎりをつつ突こうとしているゆかりに向って、まみちゃんは言った。

「うしろ。友達来てるよ」

勢いよく振り返ったので、二つに結んでいた髪の毛がゆかりの頬を思い切り叩いた。後ろに立っていたのは、ピンク色のうさぎがたぐさんついたお弁当箱を抱えた園田さんだった。

「……何か用事？」

ゆかりは、思っているより強い調子が口をついて出たことに自分でも驚いた。園田さんは何も言わずにいつものようにほほ笑んでいる。そんな二人の様子を見て、まみちゃんはこぞとばかりに姉御肌を發揮した。

「一緒に食べよっか」

ゆかりはまみちゃんを目をしっかりと見つめて、訴えかけた。

「——やめて。」

「ほら、ゆかりはそっちに座って」

勝手に席まで決められて、ゆかりはうらめしそうに園田さんの顔を見上げた。ゆかりを見つめ返した園田さんは、例の八方美人スマイルでばっちり決めていた。

「まみちゃんとゆかりちゃんは毎日一緒にご飯食べてるの？」

著で挟んだ卵焼きを口に持っていく途中で、園田さんはびたりと止まった。話に集中しているときは運動神経が少しにぶるのよね、とゆかりは思った。

「毎日ってわけじゃないけどさ。まあ最近はやかりがうちのクラスによく来てるもんね」

園田さんのことを何も知らないまみちゃんは、著の先でゆかりを指しながら言った。ゆかりはふうつとむくれると、ハンバーグを一気に口に放り込んだ

「仲良いんだ」

まだ卵焼きを持ったままの園田さんが言った。

「仲良いっていうか。同じ部活だしね。週三回は顔を合わせるし」

ゆかりは、冷たい空気がさつと通り過ぎるのを感じた。

園田さんには、部活動のことは内緒だったのだ。週に三回は習い事で早く家に帰らないといけないと嘘をつき、走って教室を飛び出してた。でなければ一緒に下校することになる。一週間に三日だけが、ゆかりに与えられた天国の放課後だったのである。

ゆかりは、恐る恐る園田さんの顔を見た。園田さんの持っていた卵焼きが痺れを切らして、ゆつくりと落下し、うまく弁当箱がそれをキャッチした。にもかかわらず、相変わらず卵焼きを持ったままの姿勢でいる園田さんは言った。「私もその部活入っていい？」

「ああ、やめて。私の安息の場所を奪わないで。」

4

「園田さんってどんな人？」

みどりがまみちゃんに聞いた。

「笑顔が素敵で、マリア様って感じ。顔もかわいらしいし、あれはモテるね。たぶん」

明るい日差しが窓辺から差し込み、グラウンドを走っていく掛声が遠くで聞こえていた。墨汁の独特の匂いが立ち込めた書道教室も、ゆかりたちにとっては誰にも邪魔されない隠れ家のようなものだ。希望、平和、努力、ありきたりな文字が壁一面を埋め尽くし、黒く染みのついた机が無造作に並べられている。ゆかりは椅子の上で体育座りをし、膝に顔をうずめた。

「みんなは分かかってないよ。園田さんが部員になるってことがどんなことか」

せつせと墨を硯に磨っている聖美が、目も上げずに言った。「でも、園田さんってゆかりのクラスで人気者なんでしょ」「でも、本当にあの子はおんなだよ」

準備室から書道セットを持ってきたみどりも口を挟んだ。「私も聞いた。癒されるから好きって子多いらしいよ。男女問わず」

聖美がようやく手を止めて、ゆかりの方を見た。「で、何でゆかりは園田さんにそんなに気に入られたわけ？」

「分からないよ。でもさ、私は言ったんだからね。絶対園田さんは書道部に入れない方がいいって。ねえ、部長」

ゆかりはまみちゃんの方を向いた。すでに半紙まで準備完了しているまみちゃんが言った。「まあ、園田さんのお手並み拝見といこうじゃないの」

入部届を職員室に出した後、園田さんが書道教室に入ってきた。緊張しているのか、いつもの八方美人スマイルだ。ゆかりが園田さんに近づいた。

「今日は、とりあえず好きな文字を書こうってことになってるから。書道展が近いけど、まずは自由に。園田さんはそこに座って」

まみちゃんの横を指差した。まみちゃんが手まねきをする。みどりと聖美が隣同士。ゆかりは園田さんからできる

だけ離れて座った。

筆が走る音と硯がこすれる音、時折半紙がくしゃくしゃと丸められる音など、物そのものが音を出している時間が過ぎた。みんな真剣に机に向き合っていた。

聖美がゆかりの方を振り向いて、口の端を斜めに上げて言った。

「ゆかり、ちょっと来て」

ゆかりが後ろから聖美の両肩に手を置いて覗き込むと、聖美がみどりの半紙を指差した。

「食事制限？」

みどりが振り向いた。今度は別の半紙を目の前に突き出す。

「馬鹿力？」

ゆかりがぶつと吹き出すと、お返しにみどりが聖美の半紙をのぞきこんだ。

「……滝沢馬琴？」

聖美は腕組みをして、真顔で言った。「何か、響きがエロいでしょ」

二人がぶつと吹き出して笑うと、聖美もクールな顔をくしゃつとゆがめてゆかりに言った。

「ゆかりは、どうせ『川上クン』とかなんとか書いちゃってるんでしょ」

「あー！ すぐそうやってからかうんだから。あんまり大きい声で言わないでよ。恥ずかしい」

そう言いながら、ゆかりはさつと自分の半紙を持ち上げた。

「K君ラブ」

「やっぱり！」

みどりと聖美は手を叩いて飛び上がった。まみちゃんが振り返って、

「みんな全然真面目に書いてないじゃん！」

と、にやりと笑った。三人が後ろから覗き込むと「ふざけてるわけじゃないよ。座右の銘なんだから」と言う。

「一獲千金」

ゆかりは感心しながら言った。

「まみちゃんらしいわ。しっかりしてる」

そして、ゆかり以外の三人が顔を見合わせた。

「園田さんの？」

三人が後ろから覗き込んだ。入る隙間がなくて、ゆかりは机の前に座った。園田さんの後ろから顔を出していた、三人の笑顔がゆっくりと真顔になっていく。そして、お互いに顔を見合わせた。ゆかりは半紙を凝視した。

「……お経？」

そこには、半紙いっぱい細かい漢字の羅列があった。くるくると蚊取り線香のような形に並べられた漢字。小さな虫がうごめくように、何重にも円が描かれていた。まみちゃんが言った。

「何を書いたの？」

園田さんは首をかしげてにっこりと笑うと、

「あ行から順に思いつく漢字を書いていただけだよ」

と言った。

「なんで？」

腕組みをした聖美が、園田さんの真後ろから言った。園田さんは振り返ることなく、

「どの文字が好きか考えてるうちにいっぱいになっちゃった」

と答えた。答えにならない答えに、一同は何も返す言葉がなかった。園田さんはその後何も言うことなく、ただにこにこしながら円状に羅列された漢字の山を眺めていた。ゆかりは、だから言ったじゃないと思いが、椅子から立ち上がり窓辺に立った。グラウンドを走る川上君の姿が見えた。

「あー！ 園田さん、袖が！」

ゆかりの心の静寂を破るかのよう、みどりが大声を出した。園田さんは文字を書くのに一生懸命だったため、硯の墨にセーラー服の袖が浸かってしまっていることに気付かなかったのだ。聖美がさっと立ち上がり、ハンカチを濡らして来て差し出した。

それを受け取らない園田さんに対して、聖美は強く、
「使って」

と言った。その声に反応したのか、園田さんはさっと立

ち上がった。そして、何を思ったかその場でセーラー服を脱ぎ始めた。

状況が飲み込まず、ぼかんとする聖美たちを残して、下着姿になった園田さんは走って廊下へ飛び出した。まみちゃんが窓辺にいたゆかりを見る。ゆかりが頷くと、みんな一斉に園田さんを追って飛び出した。

すると、園田さんは寒い廊下に下着姿のまま立っていた。ゆかりが駆け寄ると、出しっぱなしになった蛇口の水に、園田さんの脱いだセーラー服がまるごと浸かっていた。ゆかりは園田さんの方を見た。園田さんの真っ白な肌につぶつと鳥肌が立っている。しかし、園田さんは唇をかたかたと小さく震わせながら、やはりにっこりと笑おうとしていた。寒さでそれは完成しなかったため、その場にいた全員の顔が引きつっていた、ということになる。

聖美が自分のマフラーを持ってきて、何も言わずに園田さんの肩に掛けた。幸い廊下を歩く人影もなく、園田さんのピンク色の下着を他の人に見られることはなかった。

園田さんは聖美に、

「桃って中身は白いよね」

と言葉をかけた。

外はもうすっかり暗くなり、廊下には明かりもあまり灯っていない。教室からこぼれるわずかな光だけが、ゆかりたちを照らしていた。

みどりが聖美に言った。

「口、開いてるよ」

聖美は頭とあごをそれぞれの手で持つと、手で力チンと口を閉めた。

まみちゃんがゆかりに目で訴えていた。

——想像以上かも。

そんなまみちゃんに対して、ゆかりは口の端を上げて愛想笑いを返した。

ゆかりの頭の中には、赤ん坊のほっぺたのように丸くて少し黄色がかった桃が浮かんでいた。柔らかく、少し指先で押すとすぐにへこんで中の白い実が現れる。傷つけないように、そっと皮をむくと中の実の端が毛羽立つように浮き上がり、まるで産毛のようになるのだ。皮を持ったまま、

徐々に離れていくと産毛が鳥肌になり、下着姿の園田さんに変化した。桃色の皮は、そのまま下着のピンク色になる。無造作に露出した肌を想像して、ゆかりは少し恥ずかしくなり、園田さんの体をまた元の桃に置き換えた。

（そうか、果物の桃って下着のピンクから連想したんだ。自分の下着姿にちょっと恥ずかしくなって、口をついて出たのかも）

冷たい廊下が、キンキンと耳鳴りを引き起こしている夜だった。

5

ある日の放課後、いつものように書道教室でくだらないことを話していると、園田さんが会話の流れを遮って言い始めた。

「ねえ、あたし好きな人ができた」

みんな一斉に園田さんを見た。彼女は首をかしげてほほ笑んでいる。みんなお互いの顔を見やって、誰も口角が上がっていないことを確かめた。最初に口を開いたのは、まみちゃんだった。

「誰かって、聞いてもいいの？」

みんなが物音ひとつ立てずに聞き入っていると、園田さんがセーラー服のリボンを整え始めた。ゆかりが言った。

「同じクラスの人？」

園田さんは言った。

「まみちゃんと同じクラス」

みどりが言った。

「名前は何？」

「わかんない」

今度は反対側にゆっくりと首をかしげる園田さんを見て、聖美は机を指先でとんと叩きながら言った。

「何か他に情報はないわけ？」

園田さんは頬に人さし指を当てて、か上げた首が落っこちないように支えた。

「色が黒い」

まみちゃんがポニーテールの先をしきりに触りながら答

えた。

「黒いつていえば、サッカー部の佐々木か、小林？ ラグビー部の武田とか」

みどりが大きな声で言った。

「グラウンドにいるか探そうよ」

五人が窓辺に並んだ。三階の窓からは、グラウンドがよく見える。今日はサッカー部が全面を使っていた。ゆかりが言った。

「いる？ いなけりやラグビー部の日まで待つか」

そう言いながら、ゆかりの目はしっかりと川上君を追っていた。ふと気付くと、まみちゃんの目は中野君を追いかけている。みどりが窓の棧を叩いた。

「ほら、お二人さん！ 園田さんの好きな人を探してるんだだけど！」

けたけた笑いながら、二人はみどりに言った。

「だって、見ちゃうじゃんよ」

三階の窓からは、濃い青と紫色の入り混じった空が広がっていた。遠くの山間に向かうほど、水で薄めたように色がなくなる。その分、黒い山が際立っていた。金色の小さな星が、黒い山の斜め上にぼつんと取り残されたように光っている。園田さんが言った。

「あそこ、キーパーの人」

どことどこと、とみんなが首をひねってキーパーを探す。

「どつちよ」

まみちゃんが焦ったように強く言った。園田さんは指を差した。

「向こう」

あつと声を上げたのは、みどりだった。

「遠藤じゃん！」

園田さんがみどりの腕をつかんで、下から顔を覗き込む。

「みどりちゃん。知ってるの？」

みどりは早口で言った。

「知ってるも何も、幼なじみだよ。家も隣だし」

加えて聖美も右手を上げて、口を開いた。

「ちなみに私、遠藤のお兄ちゃんの彼女なんですけど」

園田さんは、みどりと聖美を交互に見ながら口をばくば

くさせた。園田さんの脳がフル回転して、二人の言ったことを音を立てながら処理しているに違いない。みんなはそんな園田さんの様子を怪訝そうに見ていたが、ゆかりだけはにやにやと笑っていた。

ようやく処理が終わったのか、園田さんはゆっくりと言った。

「じゃあ、帰ろうか」

とつさにまみちゃんは言った。

「何でよ！ せっかく分かつたんだから、今から園田さんの恋愛をどうするか話し合うんでしょ！」

ゆかりは二人の間に割り込んだ。そして、園田さんの肩にぼんと手を乗せると、みんなに向かつて、

「たぶんさ、園田さんは帰りにみどりの家を見に行きたかったんでしょ。家が隣って言ったから」

と片方の眉を少し上げて言った。聖美は顎に手をやって、口をとがらせた。

「園田さんの彼氏みたいね、ゆかりは」

ゆかりは、違うよ、と否定した。そして、みんなはまた元のように、向い合せにくっ付けられた机に戻っていく。

円卓会議が始まるのだ。

みどりは言った。

「じゃあ、園田さんの恋をやらせようよ」

まみちゃんがそれに対して、手を挙げた。

「賛成。遠藤君とは話したことあるの？」

聖美がまみちゃんの質問を遮って、異論を唱えた。

「何で突らせる必要があるのよ。園田さんのペースでやればいいじゃん」

腕組みをした聖美に、まみちゃんは自分の襟足をさすりながら、申し訳なさそうに口を開けた。

「こないだ言ったこと覚えてる？ 中野がさあ、遠藤君に彼女ができないと自分も彼女作らないって言ったの。だから、できれば園田さんには頑張ってほしいんだよね」

聖美は腕組みをしたまま、椅子の背もたれに体を預けてにやりと笑った。

「なるほどね。そういうことか」

まみちゃんが申し訳なさそうに肩をすくめた。鞆に腕を

突っ込んだままのみどりが、聖美の方を見て言った。

「聡兄、遠藤のこと何か言っていないの？ 好きな人がいるとか」

聖美はうーんと体の側面を伸ばすように捻って、

「今は彼女とかいないって言ってたような気がする」

聖美の言葉を聞いて安心したのか、園田さんはここにしながら立ち上がった。椅子がたんと音を立てて倒れそうになったので、隣に座っていたゆかりは手をのばしてそれを押さえた。

「ちよつと、トイレ」

園田さんは駆け足で行ったが、手がドアを開けるより先に、足が外へ出ようとしたため、つま先を思い切りドアにぶつけた。振動でドアのガラスがふるふる震えた。

園田さんがいなくなると、すぐに聖美が言った。

「ていうか、遠藤の好きな人ってみどりでしょ？」

みどりの顔がみるうちに赤くなる。

「違うよ！」

「でも、遠藤はみどりのことが昔から好きだったって聡が言っただよ」

みどりの頬の赤みがすつと引いていった。ゆかりたちは何も言わず、みどりの白くなっていく顔を見つめていた。

みどりは机に目を落とし、相合傘の落書きをそつと人差し指でさすりながら、

「聡兄、そんなこと言ったんだ」

と静かに言った。

みどりと聖美は小学校のときからすつと友達だ。今も同じクラスで、書道部に入学したのも一緒である。しかし、ゆかりとは違う小学校だったので、みどりと聖美はいつから仲良くなつて、いつから遠藤の兄と聖美が付き合うようになったのか。そのとき二人がどんな関係だったのかは知らない。ゆかりは触れることができない。二人は仲良しだが、遠藤の兄を挟んでやじろべえがゆらゆらと揺れるように、微妙なバランスで成り立っているのだ。

まみちゃんが思い出したように、みどりの方を向いて、

「遠藤君って、みどりのクラスの玲奈ちゃんに告白されて

なかった？」

なかった？」

と言った。みどりは再び靴の中のお菓子を探しながら、「そうだね。中学に入ったときくらいに言われてたかな」とうわの空に浮かんだような声で答えた。

「でも、断つたらしいけど。玲奈ちゃんって、結構熱しやすく冷めやすいタイプだよな」

すると、今まで頬杖をついて聞いていたゆかりが言い始めた。

「玲奈ちゃんって、今度は川上クンを狙ってるつもつぱらの噂なんだけど」

「ゆかりとライバルってわけね」

聖美が相槌を打ちながら、みどりがようやく取り出したチョコレートを手からさつと取り上げた。みどりがあわてて、箱を取り返す。聖美はチョコレートを口に放り込むと、口をもごもごさせながら言った。

「ちよつと整理しないと訳わかんないな」

すると、まみちゃんは黒板へ駆け寄った。白いチョークがかつと鳴る。

「私は園田さんにくつついてもらわないと困る」

白い線が引かれていくのを、ゆかりたちは黙って見ていた。

聖美が唐突に聞いた。

「みどりは遠藤のこと好きじゃないの？」

「好きじゃない！」

みどりが真っ赤になつて、両手で机を叩いた。ドシンという音に、ゆかりの肩が少し上がる。

「じゃあ、みどりも応援しないとね。遠藤は今たぶんみどりの方を向いてるから、園田さんの方を向くようにさ」

「そんなことないよ。遠藤は好きな人なんかいないって」

みどりは頬を手で抑えながら、早口に言った。ゆかりが黒板に駆け寄った。

「私も協力する。同じサッカー部だし、遠藤君と中野君に彼女ができたから、川上クンも彼女作るかもしれないもん」

そう言いながら、ゆかりもチョコークを手に取り、白い線を描いた。指先が真っ白になったまみちゃんがゆかりの手を両手で握った。

「そここなくっちゃ！」

聖美も黒板まで来ると、ひょいと教卓の上に飛び乗り、足を組んだ。

「私もやるわ。聡に弟を頼むって言われているしね」

最後にみどりがチョコークを持ち、ゆつくりと円を描く。

「じゃあ、みんなで園田さんを応援するってことで決まるか」

黒板には、園田さんに向かってあらゆる方向から線が描かれていた。その周りを囲む円。まるで周りに風が吹き込む台風の目のように、園田さんを中心にしてみんなが集まっていた。

教室が静まりかたるときに、またガツンと大きな音が鳴った。園田さんがまたドアに足をぶつけたのだ。がらつとドアが開いた。

「みんな何やってるの？」

四人は顔を見合せて、声をあげて笑った。そしてゆかりが園田さんに向かって言った。

「みんなで園田さんの恋愛を成就させてみせるよ」

園田さんは状況が飲み込めない様子で首をかしげながら、顔いっぱい口を大きく引き伸ばしてふふつと笑った。

暗くなつた窓の外を見ながら、みんなは帰る支度を始めた。手袋をはめ、マフラーをする。白い息の隙間から見える、透きとおつた空気のなかに無数の星が浮かんでいた。

それからというもの、書道部の活動は園田さんにどうやって告白させるかという話し合いばかりであった。

「やっぱり、普通に誰もいない裏庭とかに呼び出すのがいんじゃない？」

みどりが言うとう、聖美が筆を回しながら言った。

「いや、直接話すよりも手紙の方が冷静になれるでしょ？」

「だって、遠藤が園田さんのこと知らなかったら、気持ち悪いでしょ。いきなり手紙が靴箱とかに入ってるって」

ゆかりは、園田さんの方をちらつと見た。園田さんはみんなから少し離れて、半紙に文字を書いていた。ゆかりが近づいたことも気付かないまま、筆に力を込めている。

ゆかりは驚かさないように注意しながら、背後からそつと覗きこんだ。

「……シユウエン？」

園田さんの机の周りには、書いたばかりでテラテラと墨が輝いている半紙が並べられていた。周縁周円終焉集円終演……。そこに書かれている文字はすべてシユウエンだった。筆を硯に置くと、園田さんは振り返った。ゆかりは言った。

「何で、シユウエン？」

園田さんは何も言わずに首をかしげた。園田さんの頬に、飛行機雲のように墨が一筋付いていた。ゆかりはそつと頬に触れると、それを指でぬくつた。園田さんは、丸い瞳でゆかりのことを見上げていた。

まみちゃんが言った。

「思ったんだけど、いきなり告白してもだめじゃない？」

二人きりでデートした後には告白してどうかな」

聖美が言った。

「いきなり二人は無理でしょ。まみちゃん行けばいいじゃん。中野も呼んで四人」

まみちゃんは真剣な目つきで聖美を見つめて、

「でもそれ、何か失敗したら私の恋も終わるよね」

ゆかりは輪に戻って、まみちゃんの肩をぽんと叩いた。「それいい考えじゃん。まみちゃんももうすぐ告白するんだつたら、仲良くなつとくチャンスだし」

話し合いは辺りが暗くなるまで続けられたが、最終的に好きなテレビ番組やアーティストの話になつていった。その間、園田さんは話に交わることなく、シユウエンという言葉を書き続けていた。

「だから、今日是一緒に行けないの！」

まみちゃんが、靴のかかとをトントンと鳴らしながら強い調子で二度言った。

「だから、今日は園田さんと遠藤君の二人きりなの！」
よく分からない様子の園田さんは首をかしげていた。

作戦決行日の日曜日。快晴の下、ゆかりたち五人は、待ち合わせの駅に一時間以上前に集合していた。最後の打ち合わせである。

「はい、じゃあ最初からもう一回言って」

「えっと、まみちゃんたちが来られなくなったんで」

園田さんは目をきよるさよるさせながら、持っていた靴のひもを両手で握りしめた。

「で？」

園田さんを壁際に追い詰めて、まみちゃんが問う。

「だから、えっと、待とう。……じゃ、なくて、もう先に行こう」

「だから、今日は一緒にいけないんだってば。先に行くんじゃないで、二人きりで行くの」

ゆかりがまみちゃんを静止した。

「まあまあ、そんなに強く言わなくても。園田さんも、別にいろいろ言わなくていいよ。とりあえず来られないってことだけ言えばオッケーだから」

打ち合わせが始まって十分間、最初の一言目でつまずいてしまったのでまみちゃんのいらいが限界に達していたのである。四人で出かける予定にしていたのだが、中野君が来られなくなり、まみちゃんもやる気がなくなったのだ。聖美が口を挟んだ。

「もう確認なんていいじゃん。とりあえず、今日は最終的にうちらがゴーサインを出したときに園田さんが告白できればいいんだからさ」

すると、まみちゃんが言った。

「だめだよ！ ちゃんと仲良くなつてからじゃないと、成功率が下がるでしょ。園田さん、うちらが手を振ったら必ずトイレとかなんとか言つてうちらの方に来てよ」

園田さんは何度も頷いた。園田さんも緊張しているのだ、とゆかりは思った。

「園田さん、いつもの笑顔があれば大丈夫」

ゆかりはそう言うと、にっこりと笑った。園田さんも、同じように笑おうとしたが、ぎこちなく頬が少し上がっただけだった。

聖美が言った。

「あそこ！ 遠藤が来たよ」

みどりが、向こうから見えないように壁に隠れながら確認した。

「あいつ、二十分も前に来るなんて珍しいね。これはうまくいくんじゃないの」

ゆかりは園田さんの両手を握りしめると、

「頑張つてね」

と言った。園田さんはまた何度も頷いた。

園田さんが遠藤君と落ち合つて数分後、事件が起こった。壁際からのぞいていたゆかりたちの方を、園田さんがしきりに見ているのである。

「何か、おかしくない？」

最初に気付いたのはみどりだった。

「こつちを見てるかも」

すると、遠藤君も顔を向け、二人がこちらを気にしているのである。

「これは、何かやらかしたな」

聖美が言った。

「いきなり、作戦失敗かよ」

突然、園田さんがゆかりたちの方へ走つて来た。

「やばい、逃げろ！」

聖美が言うと、ゆかりとまみちゃんはそれぞれ壁をつたい、奥にあつた女子トイレへと駆け込んだ。一番先頭でかがんでいたみどりが、立ち上がりが遅く隠れられなかった。園田さんが駆け寄つて、みどりの腕をつかんだ。

「どうしたの？」

みどりが心配そうに言うと、園田さんは言った。

「二人、きりじゃ、息が、できなかつ、くつて、全然、しゃべ、れつ、ない、……ない、よ」

園田さんは走ってきたせいなのか、本当に息ができなくなったのか、ときれとぎれにそれだけ伝えると、その場で両腕を広げて深呼吸を始めた。みどりが女子トイレの方を振り返る。まみちゃんは、行ってきて、というように指先で遠くの方を差した。

園田さんと遠藤君を二人きりにさせて告白するという作

戦が、始まつて数分で自爆してしまつたのである。みどりは、はあと溜息を吐くと、

「仕方ないなあ」

と言つて、ドシドシと壁際から日向へと出て行った。

驚いたのは、遠藤君である。

「お前、そんなところで何やつてたんだよ」

みどりは、頭をぼりぼりとかきながら、

「いや、園田さんが気になつてついできちゃつた」

とこまかした。

ゆかりたちは、その様子を壁際から見つていた。まみちゃんは腕組みをして、指先をほとんど腕に当てながら言った。

「この際、みどりと遠藤君がくついても、私にとつちや同じなんだけど」

ゆかりたちは、三人の動向をただ見守るしかなかった。時折、トイレのふりをして園田さんが何度かゆかりたちの元を訪れたが、これといつてアドバイスもできず、単なる傍観者でしかなかった。

三人はデパートのゲームコーナーやおもちゃ売り場などで、しきりに遊んだ後、ホテルの一階にある喫茶室に入った。教会や斎場などが一緒になつた大きなホテルである。ゆかりたちは三人を尾行し、喫茶室の向かいの駐車場に隠れた。ちょうど目隠しになつていた植え木の茂みに身をひそめる。予定通り、三人は窓際に座る。聖美が訊いた。

「この後の予定は？」

まみちゃんが言った。

「ホテルの横にある公園でお散歩だつてさ」

「全く、寒いのにうちらは外で待ちなんてね。会話も聞こえないし」

一同は互いに寄り添つて、温めあつた。

みどりは、さりげなく窓際の席に誘導した。

（よかつた。空いてて）

そう思いながら、ふと窓の外を見ると、植え木の蔭から寄り添つてこちらを窺っている三人の姿が見えた。体が完

全に植え木からはみ出している。園田さんが、三人に気づき、手を振ろうと窓辺に身を乗り出してきた。みどりは慌てて、園田さんの口をふさぐと、力づくで体の向きを変えた。

「ほら、園田さん。あつちにケーキが並んでるよ。何食べようか？」

不審に思ったのか、遠藤君も窓辺から外を見ようと首を傾けた。みどりは左手を園田さんの背中に置いたまま、右手で遠藤君の肩をつかんだ。

「あんた、モンブラン好きだったよね」

遠藤君はふっと笑った。

「……よく覚えてたな」

それまで、遠藤君はあまり喋っていないかった。デパートの中をぐるぐると見て回っているときも、どちらかというともどりと園田さんの後をついて来るような感じで歩いていた。二人が立ち止まると、遠藤君も周辺にある商品を手にとってみるなどしていたが、三人で行動しているとは言い難い。みどりは気を利かせて、園田さんから少し離れてみたり、あるいはゆかりたちの方へとさりげなく戻ったりして、遠藤君と園田さんが二人きりになるように試みていた。しかし、二人になってもお互い会話を交わすでもなく、別々の方向を見ている。みどりは園田さんと二人きりになったときに訊ねた。

「どうして、遠藤と話さないのよ」

すると、園田さんはおどおどしながら、しきりに腕をさすった。

「だって」

園田さんの袖がだんだんと上がってきた。

「だって、何？」

腕をさする速さが徐々に上がり、園田さんの服に何重にも重なる折り目がついていく。みどりは園田さんの腕を捕まえた。園田さんは、はっとみどりを見上げた。

「だって、何？」

もう一度、訊くと、園田さんは少し考えた。

「だって、何なんだろう」

みどりは、ふうと溜息を吐いた。

「園田さん。私がなんとかするから、遠藤に言いたいことを言いなよ」

園田さんは少し困ったような表情を浮かべ、頷くと、

「でも、私バスポート持っていないし」

と言った。みどりは、ははっと笑うと、

「私だって持っていないよ。それも、気にすることなし！」

と大きな声で言って、園田さんの袖を引っ張った。しかし、園田さんは眉間にしわを寄せると、黙って下を向いた。

結婚式を終えた後の集団が喫茶室になだれ込んできた。

席が込み合い始め、薄暗い店内もガヤガヤとにぎやかになってきた。三人はレジの横に並べられたケーキを眺めていた。それに気づき、店員がやって来る。みどりは言った。

「モンブランを二つ。園田さんは？」

園田さんは、ケーキの方を見ながら片手で頬杖をつくくと、

「カレールライス」

と、大きな声で注文した。

7

喫茶室を出ると、三人は隣接した庭園をぶらりと歩き始めた。ゆかりたちは、ホテルのロビーの人ごみにまぎれて、それを見ていた。

「誰のチョイスよ。この場所は」

聖美がカーテンに巻かれながら、そう言った。大きな窓ガラスに指紋を付けないように気にしながら、ゆかりが言った。

「園田さんみたいよ」

「何かの思い出の場所かな」

聖美が短い髪の毛を手のひらで触りながら訊いた。

「両親の結婚式とか？」

まみちゃんはふかふかした椅子に腰掛け、足を組んでにやつと笑った。

「まさかね」

ゆかりは二人の様子を見ながら、冷静に言ってみたが、

「いや、園田さんならあり得る」と、まみちゃんに一蹴された。

三人は、ぎこちなく池の周りを歩いていた。時折、何か話しかかと思ったら、すぐに黙ってしまう。無言の時間が大半を占めていた。池にいる鯉が三人に気づき、寄ってくる。口をばくばくと開け、我先にと他の鯉の上に体ごと乗っかる。押し合い圧し合いしながら、ばしゃばしゃと水しぶきをあげていた。三人は、池にかかった橋の上でそれを見ていた。

「すげえ」

遠藤君はそう言ったが、誰も何も言わなかった。遠藤君の声はそのまま、池の水の中に溶け込んでいった。続いて、みどりが、

「何も持っていないで悪いなあ」

と、餌を撒いてくれると勘違いしている鯉に気を遣って言った。三人の顔が池の水に反射して、鯉の動きに合わせてきた何重もの輪っかの中に消えていく。遠くではしゃぐ子どもの声がやけに大きく聞こえた。園田さんがトイレに行つてくると言い、ホテルの方へ向かった。橋の上にはみどりと遠藤君が残された。

それまで晴れていた空が、いつの間にか厚い雲に覆われ始めている。しかし、雲の向こう側にある鋭い光が差し込んでおり、庭園の緑をまだらに輝かせている。鯉たちは、次第に橋のたもとから去っていく。そうやって待っていて、何ももらえないことを悟った者だけが、平穏な日常へと戻っていく。赤白黒が入り混じった一匹の大きな鯉だけが最後まで橋の下から離れようとはしなかった。

二人はしばらく口を開かなかつた。ただひたすら、じつと園田さんが戻ってくるのを待っていた。しかし、沈黙に耐えかねたのか、遠藤君が話し始めた。

「お前、俺の作った飛行機、まだ部屋に飾ってるんだってな」

みどりは慌てて遠藤君の顔を見た。彼は池の水を見るともなしに見ていた。橋の手すりをぐっと両手で握ると、みどりは言った。

「だって、ボディの編がきれいだったから」
厚い雲のせいで、どんどんあたりは暗くなっていた。今にも降り出しそうな天気には、庭園を歩いていたら人々もホテルへ戻っていく。

「あんな色は今まで作ったことなかったからな。あれは、みどり専用」

一粒、空から雫が落ちてきた。

「ありがと」

何も考えずに、口をついて出た言葉だった。みどりは、昔もらったプラモデルの札を今更言うとは思っていないが、その場の雰囲気言葉が飲み込まれた。少し、沈黙した後、突然遠藤君が近づいてきて、みどりの胸をつかんだ。二人は、橋の上で向かい合う格好になった。

「最近あんまり話してなかったけど」

子どもの時から見ていた顔が、いつの間にかずいぶんと男らしくなっていたことにみどりは少したじろいだ。声に、さらに力が込められる。

「俺は、ずっと」

間近にある顔がまともに見られなかった。しかし、目をそらすとしても近づきすぎていてそらす場所がなかった。

「俺は、ずっと、お前のことが」

遠藤君との距離が次第に近くなっていく。すると、突然みどりの背後から大きな声が出た。

「あつ……あたしだって、モンブランの方がいいもん！」

みどりは、ゆるんだ遠藤君の手を払って、振り返った。橋の袂の芝生の上に、園田さんが立っていた。

「あたしだって、本当はモンブランが好きだもん」

そう言いながら、みるみるうちに顔がくしゃくしゃになって、終いにはわんわんと声を上げて泣き始めた。みどりは駆け寄って、園田さんの両肩を抱いた。抑えようのない涙が次から次へと流れ出て、園田さんは顔を押しさへこむ。みどりは、動けないでいる遠藤君の顔を見た。園田さんの涙のように、ぼつぼつと降り始めた雨が次第に強くなってきた。髪の毛や洋服から滴り落ちる雨が肌を伝う。遠藤君は何が起こっているか分からない様子で、びくりとも動かなかった。みどりが、園田さんをホテルへ連れて行くこと

すると、遠藤君がやっと口を開いた。

「みどり。俺は、ずっと、お前のことが……」

みどりは、キッと遠藤君をにらみつけると、

「それ以上、言わないで」

と言った。それでも、遠藤君はもう一度、

「俺はお前のことが……」

と声を張って言った。みどりはそれをさえぎるように重ねた。

「それ以上、言ったら殺すから」

黙った遠藤君を置いて、みどりは園田さんを抱え込むようにしてホテルへと駆け出した。遠藤君は、その背中に向かって叫んだ。

「お前は、聡兄ちゃんのことを好きなのか？」

みどりは、振り返って遠藤君の顔を見たが、そのまま園田さんと一緒に走り去ってしまった。みどりの顔は、雨の粒か涙なのか分からないがくしゃくしゃに濡れていた。

8

あれほど泣き喚く園田さんを見たのは初めてだったが、次の日にはもうけろっとした様子で学校に来ていて少し拍子抜けした。園田さんはいつもの調子で、にこにこ微笑んでいた。しかし、誰もあの日のことには触れなかった。何度も何度も、夜が来て朝が明ける。当り前のことが、何度も訪れてはそして逃げるように去っていく。大きな雲が空一面に広がると、ぼつぼつと雨が滴る。水たまりが音を立てなくなったら、また空が青くなり、そして赤くなる。最後には黒が侵食して、気付けばまた夜が来て朝が明ける。その繰り返しだけが、事実としてそこにあった。

ゆかりは廊下を走っていた。

「園田さん知らない？」

ゆかりが声を掛けると、みんな首を横に振った。靴も見当たらない。

「早退したんじゃないの？」

全く気分が悪そうに見えなかったが、そう言われて担任

の先生のところへ聞きに行くと、昼ごろ家に帰ったのだと言った。ゆかりは園田さんが何も言ってくれなかったことを思うと、少し胸が重たく感じた。

書道教室に行くと、まみちやんが

「早退したの？ 大丈夫かなあ」

と言った。すると、みどりが

「じゃあ、今日の部活は園田さんのお見舞いっていうのはどう？」

「賛成！」

すくさま、みんなは荷物を持ち、学校を飛び出した。

園田さんの家は扉で覆われており、門はこげ茶色で草のような形をしている。門を開けると、家まで広い庭が続いていた。家の形こそ古いものの、洋館のような豪邸である。壁面は最近塗り替えたかのように真白であった。聖美が言った。

「ゆかり、園田さんちに来たことあるの？」

ゆかりは家を見上げながら言った。

「場所は知ってたけど、入ったことなかったよ。こんな豪邸だつて知らなかった」

まみちやんが言った。

「両親とか何の仕事してるんだろうね」

ゆかりは玄関先まで来ると、緊張したように恐る恐るインターホンを押した。

開かれたドアの先には、園田さんによく似た若い女性が立っていた。

「園田さんが早退したから、お見舞いに来たんですけど……」

「まあ」

その女性は甲高い声を上げると、ゆかりたちを部屋に通した。

エンジ色で統一された部屋には、アンティークの家具や置物が所せましと飾られている。暖炉の薪がばしんと音を立てる。今にも落っこちてきそうなシャンデリアが、暖炉の火を反射していた。大きなソファに座ったゆかりたちは、

居心地の悪さを感じてもじもじしていた。

「出迎えてくれた女性が、ふかふかした毛のスリッパをはいたばと言わせてやって来た。」

「ごめんなさいね、あの子ちよつと寝ているものだから。お茶でも飲んで、もう少し待ってくれる？」

ゆかりたちは、はいと勢いよく返事をして、背筋をびんと張る。園田さんのお母さんはにっこり笑うと、チョコレートのような厚いドアを押してまた出て行った。書道教室ではあれだけ大騒ぎしているゆかりたちなのだが、誰も何も話そうとしない。みどりは、じゅうたんの毛を足で右に左にとたなびかせ始めた。聖美は机の模様をしきりに触っている。まみちゃんほうつむいて、握りしめた手を見つめている。

ゆかりは、部屋をぐるりと見渡した。すると、壁にかけられた一枚の絵が目飛び込んできた。ポマードでびっしりと分けられた黒髪をし、鼻の下にふた筋の細いひげを生やした男の人の肖像画である。絵の背景に描かれている暖炉は、この部屋と同じ形のような。男が座っている椅子は、暖炉の脇に置いてあるものと同じように見える。ぼんやりとその絵を見つめていると、園田さんのお母さんが紅茶を持って入ってきた。

「自分の家だと思ってくつろいでくださいね。」

スライスされたレモンの浸っているカップを各々手に取り、ずずつとすすった。園田さんのお母さんは、絵に描かれていた椅子をテーブルに寄せて座った。

「あの子が必要な友達を連れてくるなんて、初めてのことだから。」

色の白い、ふくよかな頬が目じりに近づいた。ゆかりたちは横目で互いを見やっつてから、茶色の紅茶を覗き込んだ。紅茶の表面には、レモンを囲むようにして何層にも渡る輪が広がっている。

沈黙を割るように、園田さんのお母さんは話し続けた。

「家に帰って来たときは熱が少し高かったんだけど、少し寝たら引くと思うから心配しないでね。」

部屋の中には、暖炉の火が燃える音と紅茶をすする音が響いていた。

ゆかりは誰も話さないのを確認すると、息を吸い込んだ。

「あの絵はここで描かれたんですか？」

みんな一斉に振り返ってその絵を見つめた。椅子に座った絵の中の男性が、驚いたように目を丸くしている。園田さんのお母さんは、胸まである巻かれた髪の毛を耳にかけた。

「あの絵は、私の父の肖像画なの。この家はもともと父のものなんだけど、私たちが最近になるまで存在を知らなくて。」

途中で紅茶をすすった。伏せた目の長いまつげが、きれいに並んで下向きに伸びている。爪の赤色が、白いカップの上に花のような彩りを添えている。口をカップから離すと、左手で底を支えた。

「父が亡くなってから、この家が私のものになって。それで引越を決めたの。越してくる前からあの絵は、この部屋に飾られていたわ。この家を何のために父が使っていたのか、未だによく分からないんだけど。」

みどりは出されたクッキーに手を伸ばした。

園田さんのお母さんは言った。

「あの子は時々変なことを言ったりしない？」

ゆかりたちは顔を見合わせると、口の片側を少しあげて笑った。乾いた空気に小さな笑い声に乗った。園田さんのお母さんは、やつぱり、と言うようにカップを見た後、

「小学生のときはもつとひどくて、なかなか友達もできなかったのね。休み時間なんか一人で過ごすことが多かったみたいで、家でもまったく友達の話をしなかったし。もつと小さい頃はそれほどでもなかったんだけど、ある時突然ね……」

ゆかりは口を開いた。

「何か原因があったんですか？」

園田さんのお母さんは、眉を少し上げるときこちなく微笑みながら、

「あの子の父親が突然いなくなったの。それがショックだったのか、その頃からあの子が何を考えているか分からなくなっちゃって。」

と言って、足を組んだ。

いつの間にか外は真つ暗になっていた。大きな窓は濃い群青色でエンジ色の部屋と対をなすようである。暖炉の光に照らされたゆかりたちのシルエツトが、窓を通り抜けるように映っていた。その日は結局、園田さんには会えなかった。

「はあ、何であんなのが良いのかねえ。」

まみちゃんが首をかしげながら、大きく溜息を吐いた。

「聖美が腕組みをして、同様に」

「審査員って何を見てるわけ？」

と言う。それに対して、みどりが言った。

「よく分からないってところが良いんじゃないの。審査員の威厳が保てるでしょ。」

園田さん以外の四人は、書道教室の黒板を見上げていた。そこには、「シュウエン」と書かれた半紙が一面に貼られていた。その隣に、赤のチョークで書きなぐられた先生の字がある。

「書道展で特選になりました。」

ゆかりが言う。

「ってか、いつこの作品が書道展に出されたの？」

まみちゃんが言った。

「先生が勝手に出したらしいよ。園田さんは別の作品を出そうとしてたのに。」

聖美がセーラー服のリボンを整えながら、つぶやいた。

「ついに、部長も交代か。」

まみちゃんが腕まくりをした。

「部長の意地をかけて、交代はさせません！ さあ、今日から次の書道展に向けて書き始めるよ。」

否定の言葉をそれぞれに発しながらも、ゆかりたちは席に座る。目の前に、折り目のついたままさらな半紙が敷かれている。筆をとって、ゆつくりと墨をつけた。茶色の毛がどんどん黒く染まっていく。ゆかりは息を吸い込み、吐き出すと、白い紙に最初の点を打とうとした。半紙に筆先がついた瞬間、廊下の方からべしゃつと何かが潰れるよう

な音がして、ゆかりは慌てて筆を離した。筆先からぼたぼたと黒い雫がしたり落ち、半紙に小さな道筋を作った。みんなが顔を見合わせた。一斉に音のした方を向く。ドアの窓ガラスにロールシャツハの蝶が映っていた。

「何、あれ？」

一番にドアのところに駆け寄ったのはまみちゃんだ。おそるおそるドアを開く。まみちゃんの肩越しにみんなが見ると、園田さんが白いクリームを頭からかぶって座っていた。園田さんはにこにこしながら、

「はい」

と何かを差し出した。半分以上がこぼれて原型をとどめていない、スポンジがむき出しのケーキであった。ゆかりが心配そうに言った。

「どうしたの？」

園田さんは、

「お祝いしようと思って」

と、顎を少し上げて笑った。

「まずは、片付けだね」

まみちゃんはしゃがんで、園田さんの頬についたクリームを手にとって口に入れる。聖美が言った。

「やっぱり、部長はまみちゃんがいいや」

みどりは、潰れたケーキを受け取った。ゆかりはクリームにまみれた園田さんの手をとり、よろよろと滑る彼女を立ち上がらせた。四人は、園田さんを囲むように立ち、ふつと口を緩める。安堵の息が漏れた。

中心にいた園田さんは、満面の笑みを浮かべて、

「お菓子でできた制服があれば、目立たないのね」と言った。

星屑書房 メンバー紹介

真一
実路



「いちろまみ」と申します。
福岡市在住の社会人。
好きな動物はペンギンです。
なぜなら、私に似てるから。
ご愛読よろしくお願ひします。
では、ごきげんよう☆

詠
人不知



ずらし飛び見よ。



ア
リ
コ
・
ノ
オ
ノ
ミ
ユ
キ
・
シ
ノ
ブ
キ
・
シ
ノ
ブ
キ

皆さんはスピリチュアルな存在
を信じますか？私は、まあ普通
です。
安心して下さい。あなたはも
っと幸せになれます。
素敵な恋、しようね？



短歌を作ってみました。
57577です。
季語は要りません。
「お〜いお茶」に載ってるのは
俳句です。
いつもぼんやり短歌のことを考
えています。




この度はこのような場に参加さ
せていただきまして、大変光栄
に思います。
1人でも多くの皆様に「創星」
を読んでいただけますように。

今月の占い

チョコ好き…忘れものに注意。
パン好き …天気予報を見よう。
モナカ好き…好きなら好きって
言いましょう。

お知らせ

星屑書房は好き勝手に表現活動をしていく創作集団です。
今後の活動予定等は随時更新します。

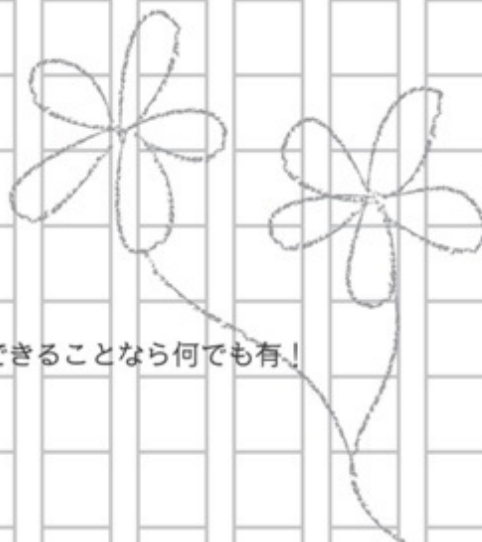
 ホームページアドレス

<http://stardustbooks.soragoto.net/>

メンバー募集

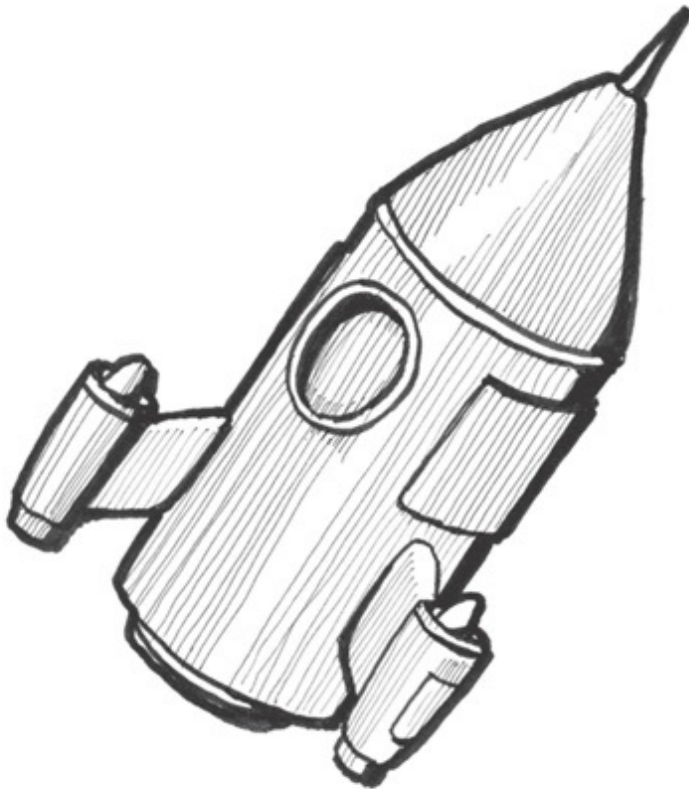
星屑書房では随時新メンバーを募集しています。
小説・詩・マンガ・写真・エッセイ・評論・その他諸々紙上でできることなら何でも有！
興味のあるアチタは下記までご連絡を！！

stardustbooks@live.jp



CREATE!

PRESENTED by STARDUST BOOKS



vol.1